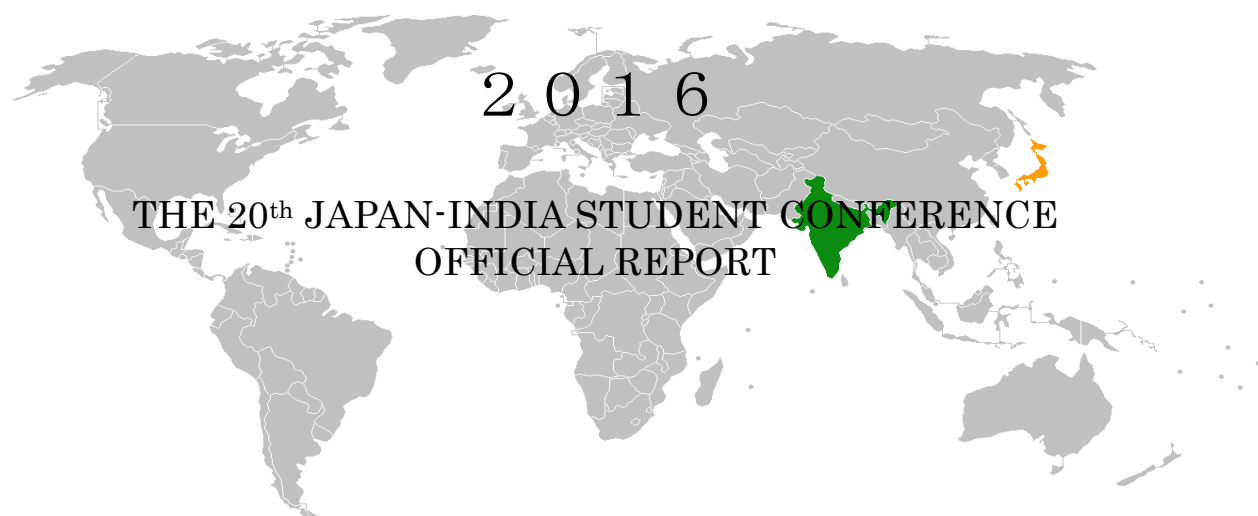


第20期
日本インド学生会議
—活動報告書—



2016

THE 20th JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE
OFFICIAL REPORT



2016年

第20期 日本インド学生会議



開催地

コルカタ、チェンナイ、デリー

開催期間

2016年8月10日—9月5日

目次

はじめに

1. 実行委員長挨拶	5
2. お世話になった方々からのお言葉	6
3. 実行委員メンバー一覧	26

第一部 日本インド学生会議

1. 基本理念	30
2. 概要	32
3. 沿革	34

第二部 活動報告

1. 年間活動報告	52
2. 各局活動報告	53

第三部 本会議活動報告

1. 実施要項	57
2. 本会議日程	60
3. 本会議日録	61
4. 在外公館・企業訪問報告	85
5. 分科会報告	109
6. 文化活動報告	134
7. ホームステイ報告	140
8. 修了書	143

第四部 個人語録

1. 日本側実行委員からの声	146
2. インド側学生からの声	147

おわりに

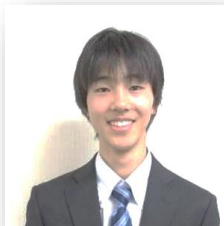
1. 謝辞	149
2. 日本インド学生会議規約	151
3. 編集後記	157

はじめに

- | | |
|--------------------|----|
| 1. 実行委員長挨拶 | 5 |
| 2. お世話になった方々からのお言葉 | 6 |
| 3. 実行委員メンバー一覧 | 26 |



1. 実行委員長挨拶



第 20 期 実行委員長
東京大学教養学部文科一類 2 年
中村 恒輝

日本インド学生会議の記念すべき第 20 期の会議が、2016 年夏にコルカタ、チェンナイ、デリーの三都市に渡り無事開催されました。会議の運営にあたりまして、助成後援をくださった財団、大使館関係者の方々を始め、各都市カウンターパートの皆様、訪問先団体の皆様など関係者全ての方々にこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。20 年という大きな節目を迎えられましたのもこのような無償の厚意の積み重ねの結果だと強く実感しております。

近年は国際的な学生団体も多々見られますが、インドへ渡るだけではなく、インドと日本のメンバーが対になって運営をする団体自体は珍しいのではないかと思います。20 期のスローガンは「双方向」であることを柱と据えていましたが、それを達成するチャンスを持つ団体は極めて稀であり、これこそが日本インド学生会議の一つの重要な意義なのではないかと私は考えます。

日本インド学生会議の双方向性という独特の強みは初めに申しましたように無償の厚意がここに集まっているからこそ達成されていると感じます。インドでは学生が自力で資金を稼ぐというのは現実的でなく、インドの学生が個人で全ての渡航費を賄うことは難しいのが実態です。また学生会議というものが政治団体と認識され、周囲の賛成を得られないこともそう珍しくないそうです。その中で、身一つしかない私達に力を与えているのは財団、大使館、企業、法人、支援者そして OBOG の方々です。

この報告書をお読みになっている支援者の皆様が私達の活動の源泉です。メンバー一同改めて心より御礼申し上げます。そしてこれからの日本インド学生会議も宜しくお願い致します。この団体が次の 10 年も活気をもって日印に貢献することを祈念致しまして私の挨拶とさせていただきます。

2. お世話になった方々からのお言葉

在日インド国大使よりメッセージ

H.E.Ambassador.Mr. Sujan R. Chinoy

AMBASSADOR OF INDIA
भारत का राजदूत




Message

It is with great pleasure that I extend my congratulations on the successful completion of the 20th Japan-India Student Conference (JISC) organised in India between 10th August and 5th September, 2016.

I sincerely hope that the experiences and friendships nurtured at the JISC will imbue each participant with a desire to further academic, cultural and socio-economic exchanges between India and Japan in the future.

Since its founding in 1997, JISC has made a significant contribution to inter-cultural relations between India and Japan by organising a platform which allows students from our two countries to engage in meaningful dialogue. I would like to acknowledge the hard work and dedication of the organisers whose efforts have made the annual student conference possible.

I take this opportunity to also convey best wishes to the JISC, its members and all the participants.


(Sujan R. Chinoy)
Ambassador of India

Tokyo
22 October 2016

在インド日本国特命全権大使 平松 賢司様

第20期日本インド学生会議が有意義な成果を挙げられたことに心よりお慶び申し上げます。

この11月、モディ首相が安倍総理との首脳会談に臨むべく日本を訪問されました。その際、私も日本に帰国してその一部始終に立ち会いましたが、終始、友好的な雰囲気の中、経済、防衛、国際場裡における協力から人的交流の促進まで、幅広い話題が取り上げられました。この会談の成果は共同声明という形で結実していますが、大事なのは単に共同声明をまとめることではありません。これに基づいてどれだけのことを実行に移し、結果を出すことができるか、「特別の戦略的グローバル・パートナーシップ」の下、よりよい世界を作るためにどれだけ協力していけるのかが問われています。私たちの仕事は、この共同声明が新しいスタート地点になります。

両首脳が新幹線の座席で向き合って親しく話をしていた姿を報道でご覧になった方も多いと思います。東京から新神戸までの道中約2時間半、安倍総理とモディ首相は、流れる景色に時折目をやりつつも、夢中になって日印両国の将来のこと、現在の課題について議論を交わしていました。こうしたリーダー同士の強固な結びつきの下、皆さんのような若い世代がその熱を受け継ぎ、「最も可能性を秘めた二国間関係」とも言われる日印関係の新たな担い手として名乗りを上げたことは素直に喜ばしいことです。

二つの国が付き合うに当たり、政治的な立場が近いこと、安全保障上の利益を共有すること、経済的な結びつきが強いことは、その両国の関係をより近しく、強固なものにする上で重要です。いま、日本とインドはまさにそうした状況にあります。法の支配、民主主義、基本的人権といった普遍的価値を共有することはもちろん、日米印共同訓練などを通じて防衛面での連携も強めています。また、皆さんがこの地で実際にご覧になったように、当地への日系企業の進出は益々盛んであり、かつ、インドは多くの企業にとって短期的にも中長期的にも最も有望な投資先とされています。しかし、国と国との付き合いを支えるのは人です。誰かが現地に来て汗を流さなければ、どんなに政治的・経済的に近い関係を築いても、それを発展させ続けることはできません。若いうちからインドのことに興味を持ち、実際にその目でこの国の状況を見、この国の若者と体当たりで議論した経験は、将来、皆さんがそうした役目を果たそうとした際に、きっと糧になると思います。

最後になりましたが、皆さんが歴代の先輩たちの築いてきた日本インド学生会議の看板を守り、さらにそれを発展させるような活動をこのインドの地で展開したことに敬意を表します。皆さんがこれからもインドに関心を持ち、そこから広く世界に視野を広げていかれるよう、心より祈念しています。また、来年はインドの若者たちを日本に受け入れる番と伺っています。今なお変わりゆく日本、変わらぬ伝統が根付く日本を彼らに印象づけるような行事が企画されることを期待しています。そして、例え生まれ育った国は違っても、同じような悩みを共有し、同じような趣味を持つ若者同士、長く続いていく付き合いがそこから始まってほしいと思います。

在コルカタ日本国総領事 夔賀 政幸様

第 20 期日本インド学生会議が成功裏に終了したことを心よりお喜び申し上げます。

私は本年 10 月末にコルカタに着任したため、皆さんにお目にかかることは出来ませんでしたが、開会式及び日本語会話協会のパーティーに出席させていただいた当館館員より、日印両国の歌や踊りが披露され、互いの文化に対する興味や尊敬が感じられる素晴らしい行事であったと聞いております。また、当地滞在中には、様々なテーマについて議論された分科会に加え、ホームステイ、マザーハウスでのボランティア活動等を通じて、当地の人々と密接に交流しながら有意義な体験をされたものと思います。

忙しい大学生活の中で、学生の皆さんが主体となって情報収集、企画、予算立て、渉外、広報等を実施する日印学生会議には、非常に大きな意味があると思います。大学の垣根を越え、国の垣根を越え、各人が責任意識を持って会議を形作るには様々な苦労があったと思いますが、その経験は今後の人生の糧として活かされるものと信じております。

日印学生会議は、第 1 期本会議がコルカタにおいて開催されて以来、長きにわたり当地の学生との交流を積み重ねてきていると承知しております。毎年参加者は変わりますが、皆さんの先輩方がこれまではぐくんでこられた友情は、当地において確かに引き継がれていると感じられたのではないかと思います。そして、今期の皆さんが実際に現地を訪れ肌で感じた「インド」も、コルカタの学生が皆さんを通じて知った「日本」も、それぞれの記憶に強く刻み込まれたはずです。

今日の日印関係は、政治、経済、安全保障、文化等様々な分野においてより緊密なものになっていますが、その基盤となるのはこのような人と人との血の通ったつながりです。そして、この日印学生会議が、二国間の人的交流の大きな一翼を担っていることは言うまでもありません。次の時代を担う皆さんが、このような貴重な機会で得られたインドでの体験を忘れることなく、それぞれの道で大きく羽ばたかれることを願ってやみません。最後になりますが、日本インド学生会議の今後の更なるご発展を心よりお祈りいたします。

在チェンナイ日本国総領事 馬場 誠治様

第20期日本インド学生会議が所定の日程を無事終了されたことをお慶び申し上げます。今回のインド訪問で日本インド学生会議全体としてまた参加された個人としてそれぞれに大きな成果があったものと思います。20年の長きに亘る事業で培われてきた知見、経験に今年の新たな成果を取り込み日本インド学生会議の組織記憶として後代に引き継がれることを願って止みません。

とりわけ、8月中旬にチェンナイを訪問された折にはインフラ、教育、文化、科学と社会の分野別に当地の同世代の若者と突っ込んだ議論を行ったと聞いています。こうした議論を通じて一つの同じテーマであってもその捉え方さらにはそのテーマを考える切り口にも違いがあることを認識されたのではないかと思います。この相違は、日本の考え方とインドのそれとの違いなどと単純に割り切れるものではありません。その背景には、個人としてのバックグラウンドの違いから始まって現に直面する社会の現状やそこに至る歴史的積み重ねに至るまで様々な要素が複雑に絡み合っています。こうした相違があることを前提にした上で、日本インド学生会議の本来目的でもある日印両国民間の相互理解の増進、友好関係の促進を如何に進めていくか参加者一人一人が考え、自分なりの答えを見つけて頂きたいと思います。

今期の皆さんが在チェンナイ日本国総領事館を訪ねられた際、私はインドの多様性とそれらを包摂するインド全体のアイデンティティについて私なりの疑問を提起しました。今もその答えを模索しています。第20期日本インド学生会議の皆さんにもインド訪問で得られた知識、経験を踏まえてこの根源的なテーマ、「インドの多様性とそのアイデンティティ」にも思いを馳せて頂ければ幸いです。

さて、今期の活動に参加された皆さん全員が年間を通じての作業、行事を通じて貴重な体験を積まれたものと思います。その集大成たるインド訪問に至る長い準備期間の間、企画立案や計画策定、アポイントの取り付けから宿舍・交通手段などの詳細アレンジメントに至るまでの作業を行いつつ、並行して参加者全員で議論を戦わせて考えを集約し、プレゼンテーションに纏める作業に勤しんでこられたと思います。こうした1年間という時間軸の中で性格の異なる幾多の作業を順序だって、更には遅滞なく進めていくという経験が今後の社会に羽ばたいていく上での貴重な訓練となることでしょう。

日本とインドの間では政治、経済、文化、学術等々多様な分野で重層的な関係が築かれています。そしてその何れもが両国関係の進展に役割を果たしています。皆さんもその重要な一翼を担って今後の両国関係の進展に貢献していかれることを希望します。

第 20 期日本学生会議の成功を祝す

公益財団法人日印協会 代表理事・理事長 平林 博様

日本学生会議が 20 期を迎えたことをまずお祝い申し上げます。

今日でこそインドは世界的に注目を集め、日印関係も政治安全保障、経済、文化、科学技術など多方面にわたって発展しつつありますが、日本学生会議はこのような状況に先立ってインドの重要性に着目し、大学横断的に発足し、その後も地道な活動を展開してこられました。日本学生会議の先見の明ある先駆者やそれを引き継いでこられた先輩及び現役学生の皆様に対し、心からの敬意と感謝の気持ちをお伝えしたいと存じます。

本年の訪印団は、コルカタから始まりチェンナイを経てデリーに至り、1 カ月近くのインド訪問を成功裏に終了されました。インドの大学、日本政府の関係機関、代表的な日本企業などを訪問したほかインドの寺院、各地の世界遺産の視察、本場でのヨガなどの体験など、実に充実した内容であったと考えます。

インドは歴史的に日本と関係が深く仏教を通じた絆もあり、世界でも有数の親日国ですが、日本人のインド理解はまだ十分ではなく、時に誤解と偏見が付きまとっていると言わざるを得ません。現在の日印関係は、両国政府によって「特別な戦略的グローバルパートナーシップ」と称され、立派な形容詞が 3 つも付いた重要かつ良好な関係にありますが、今後を展望すると、人的交流特に青少年交流が極めて重要であると考えます。

日本学生会議は、多くの大学を横断して優秀な学生が自発的に集っておりますので、今後の青少年交流をリードする役割が期待されております。

実は、大阪大学に私が創設を支援し命名した SWADOM（ヒンディー語のセルフを意味する *swadesh* と英語の知恵を意味する *wisdom* との造語）と称する学部および大学院横断的な学生クラブがあり、今日では大阪大学国際問題研究会 SWADOM として活発な活動を行っております。SWADOM はしばらく前に来日したジャイトリー印財務大臣の大阪大学での講演会を企画し、その縁で 9 月に訪印した SWADOM メンバーたちは、デリーの財務省に招かれてジャイトリー財務大臣にお会いするという破格の待遇を受けました。11 月中旬に来日したモディ首相の神戸訪問にあたって、在日インド大使館や在大阪総領事館の要請によりモディ首相のプログラムにかかわり、その成功のために支援しました。

私としては、日本学生会議が SWADOM のように、インド側との関係をさらに拡大強化していくことを願っております。日印協会も日本学生会議を引き続き応援し、必要な支援を差し上げ、ともに日印関係の増進のために歩んで行きたいと考えております。

日本語会話協会チーフパトロン ニガム 和子先生

今回は第20周年目の印日学生会議という記念すべき年にあたるのでいつもと違う何か特別なことが出来ないかといろいろ検討しました。分科会の会場として例年より数倍広い会場を借りられ、日本側インド側30人のメンバーが四つのテーブルに分かれ、教育、社会、文化、インフラ、経済などのテーマでゆっくり話し合うことが出来ました。

バードワン大学福学長のS.サーカー教授をチーフゲストとして日本総領事館の田中総領事代理に特別ゲストとしてご出席頂いた開会式で始まり、3日間の分科会、工場見学、チャイルドケアホームのNGO見学、市内観光、マザーハウスの施設でのボランティアワーク、学校訪問、二日間のホームステイ、分科会の発表会、閉会式、さよならパーティと一週間という短い期間をフルに活用できたかと思います。

閉会式の中でインド側男子学生の一人が言った「準備期間をいれこの三ヶ月は自分にとって今までの人生で一番充実した毎日だった」と涙を浮かべながら感激した声で言った彼の言葉が心に残っています。

小さなインシデントもありましたがこれらの経験がこれからの会議を運営していく上での栄養分となり25周年、30周年と意味のある活動が続けられることと信じています。

ABK AOTS DOSOKAI Chairman Mr.M.R.Ranganathan

The ABK AOTS DOSOKAI thanks the JISC Team which visited us in 2016 and helped us to strengthen our efforts to promote Japan India relationship. We sincerely appreciate the active and enthusiastic participation of JISC members and their excellent cultural performance on the first day in spite of the fatigue due their travel.

Their interactions with our members and the student community deserves special mention and our deep appreciation with heartfelt gratitude.

ABK – AOTS DOSOKAI, Tamilnadu Centre, Chennai, India had been partnering with JISC thanks to the introduction of Japan India Association Tokyo and the continued efforts of Nagahama sensei from the year 2009 onwards to discuss and exchange views / opinions on varied topics as detailed below

Education→Artificial intelligence, chronological

Society →Identity caste, immigration

Culture →westernization, media

Economics→global economy, from the viewpoints of local and global

With the student community in Chennai through Table discussion.

ABK – AOTS DOSOKAI, Tamilnadu Centre in coordination with Tamiladu Chamber of Nippon India Trade & Industry (TACNITI) organized the 20th JISC in Chennai, India from 20 to 27 August 2016 in which 8 students from different Universities of Japan.

The event was supported by Consulate General of Japan at Chennai, Japan External Trade Relation Organization (JETRO), Chennai, Indian Institute of Technology (IIT), Chennai Institute of Technology (CIT) & India Yamaha Motor Pvt. Ltd., Sriperumbudur where they had group discussions with the employees.

During the course of the conference the students were taken for sightseeing to Mahabalipuram (shore temple), Marina beach and shopping at malls like , Skywalk, City Centre, etc., Home stay was also arranged for all the JISC participants to know more about Indian culture, tradition , cookery, etc.

During the valedictory ceremony certificates were awarded to the JISC participants. The JISC participants enjoyed and relished the taste of the Chennai food.

Some of our teachers like Ms. Shruthi Venkatesh, Ms. Suchithra, Ms. Mithra, Ms. Balarupini & Mr. Aruloli coordinated in the successful conduct of the 20th Japan India Student Conference.



Performance of 20th JISC Team during the welcome dinner



Group photo taken during the Welcome ceremony of 20th JISC Team



20th JISC Team had group discussing with our Japanese Language School students



20th JISC Team had discussion with students of Chennai Institute of Technology (CIT)



20th JISC Team had group photo with H. E. Mr. Seiji Baba, Consul General of Japan in Chennai



20th JISC Team had group photo with JETRO, Chennai



20th JISC Team had discussion with Indian Institute of Technology (IIT, Chennai)



20th JISC Team has practice Yoga



20th JISC Team had group photo with India Yamaha Motors

Prof. Ashok K. Chawla

Chief Scientist, CSIR-NISCAIR &
Visiting Professor at APU, Japan and Visiting Faculty at JNU, New Delhi
国立科学コミュニケーション・情報資源研究所、主任研究担当)兼立命館太平洋
大学客員教授・JNU 大学客員講師

20期の日本インド学生会議(JISC)がコルカタ・チェンナイ・ニューデリーにて予定どおり進められましたことは、学生・関係者にとりまして大変喜ばしいことであったと思います。小さな活動としてスタートした日本インド学生会議は、5年後には25周年の記念すべき年を迎えます。2001年にデリーで開催されてから、ほぼ毎年何かの形で携わっている私にとりましても、活動の内容、そして参加されている学生の貢献度、周囲からの活動への期待、すべて徐々にグレードアップしてきているようにみえます。

今回のニューデリーの活動に関して申しますと、小さなハードルなどを除けば、全て実りのある結果に繋がっていたように感じました。小さなハードルも、一方ではそれを乗り越えたことは参加者にとりまして貴重な経験になったと思います。JISCの活動において長年勉強会を設けてきたことは、私にとりましても勉強になる良い機会となっています。私は日頃より研修にも携わっていますことで、日常的なやりとりからインド人の若い世代の考え方などは、ある程度の把握が可能です。しかし、日本の若者とふれあう機会は多くはありません。この勉強会を通して、日本の若者の考え方、ものの見方、価値観、言葉遣い、国際感等々について知る機会を得ながら、皆さんからのインド・インド人に関する疑問点、誤解などに対してコメントをすることで、インドへの理解を深くするお手伝いとなっていますことを大変有意義なことと思っています。

毎期、実行委員会の新しいメンバーによる進め方をみてみますと、期ごとに異なった進め方で活動を行おうとしていることにより、インド側では少しだけその影響がみえることとなります。インドの場合、物事の進め方はマニュアル化されていないことが多くて、改善しようとしても限られたものとなります。もう少し組織化、システム化が期待されます。

一方、日本側のメンバーをこの数年間みて感じたことですが、固いマニュアル化から少し柔軟性を込めた、ある意味では国際化へのステップが踏まれているように見えます。

す。非常に歓迎したいものですが、日本の今までの強み、良い伝統を妥協しない改善が好ましいです。私の過去のメッセージの繰り返しとなりますが、そこに創設者の長浜先生、又 OB・OG の中で協力してくれる人からの知恵を生かしながらの道がもっと好ましいものです。

今回も日本語学校の学生との交流、そしてアグラへの旅はインド側の学生との友好的な関係作りに繋がったと思っております。

勉強会での皆さんから感じましたことですが、皆さんが知りたいことを活発に質問したりすることは印象的でした。例えば、インドの英語学習の有無による格差の問題、インドでの IS による事件によってインド国内におけるイスラム教徒への偏見が増すようなこと、又ノーベル賞受賞者サティアールティ氏のような海外から評価されているインド人のインドでの評価はどうか、あらゆる観点から関心深い質問で、有意義な交流が行われたことは何よりと思っております。

引き続き、JISC のみなさんのご活躍を期待したいと思いながら、私の挨拶とさせていただきます。

東京大学インド事務所長 吉野 宏様



THE UNIVERSITY OF TOKYO INDIA OFFICE
B-6/22, Ground Floor, Safdarjung Enclave,
New Delhi-110029, India.
Tel:011-4203-2064
Email: indiaoffice@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

2016年11月1日

第20期日本インド学生会議 御中

皆さん御無事にインド訪問を終えて、ここに報告書が纏まり、先輩の築いたインドとの交流の歴史に新たな1ページを加えられましたことお慶び申し上げます。

当事務所は2012年1月バンガロールに開設し、これまで皆様をバンガロールでお迎えしましたが、昨年12月ニューデリーに事務所を引っ越しましたので今年から場所を変えて新事務所にて皆さんと今回お会い出来ましたこと、とても光栄に思います。

インドも日本も日々変化して行く中で同世代の人とお互いに意見交換して、明日の世界、インドそして日本に思いを馳せることは、今後の自分の人生の生き方を考える上で貴重な経験であったと思います。

私は毎日インド人高校生や大学生に接して、日本への関心が年々高まりつつあることを感じております。昨日は国立デリー大学で東大梶田教授(2015年ノーベル物理学賞授賞)のご講演会があり、科学者志望の高校生から大学院生まで300人以上が集まり活発な質疑応答が行われて盛況でありました。そして今月上旬、日本から高校生が修学旅行で約150人ニューデリーにやって来て高校生同士の交流会が予定されております。今月中旬は、インドから高校生が100人余り日本を訪問し、東大本郷キャンパスを訪問するので今まさにインド人留学生と一緒に歓迎会開催の準備を進めているところです。

人との新たな出会いは感動的なものがあり、夢が広がるものです。インドでの出会いを大事にされて益々学業に励まれますことを期待しております。

敬具

吉野宏
留学コーディネーター(インド)
東京大学インド事務所長



日本インド学生会議顧問 国際基督教大学 上級准教授 近藤 正規先生

日印学生会議メンバーの皆様。

日印学生会議のご成功、おめでとうございます。インフラ問題から死生観まで幅広く密度の濃い議論ができたようで、何よりです。

先日のインドのモディ首相の訪日でも、人的交流の重要性が強調されていましたが、記念すべき第20回目の日印学生会議がこうした成功で終わったことを嬉しく思います。

今回の日印学生会議の報告書は、今後の日印関係の深化にも役立つことでしょう。皆様の今後の益々のご活躍を祈念いたします。

日本インド学生会議創設発起人 長浜 浩子先生

日本インド学生会議(JISC)は、20年目の本会議活動も無事終えることができました。活動を支えて下さった皆様には、お一人おひとりにお目にかかりお礼を申し上げたい気持ちでいっぱいですが、まずは書面でのご挨拶とさせていただきます。

長年にわたり大きなご協力をいただきましたこと、ありがとうございます。

インドも日本も20年の間には様々に変化いたしました。JISCの活動におきましては、年を重ねるごとにパソコンを介しての情報共有が、その範囲を拡大し続けていることを実感するばかりです。創設当初は、電話・FAXと郵便が主な通信手段で、時間がかかる、利用料金が高い、着信には不安もあるという環境の下での活動準備でした。それでも、インドと日本の学生との出会いの準備には十分だったと思えます。

コルカタで第一回目が開催されたのは、インドが独立50年を祝った年でした。そして、マザーテレサが天に召された年でもあります。マザーをJISCメンバーが囲んで撮影した写真は、私にとっての宝物の一つとなっています。

JISCの活動の中で得た魂に寄り添う宝物は多くありますが、20年という節目の年に特筆したいのは、在コルカタ日本国総領事館の総領事であった川口三男様より開会式でのご挨拶の中に「日本インド学生会議は歴史に残る活動」と、お言葉をいただいたことです。続けることの大切さを、更に心に強く刻んだ瞬間でもありました。

JISC第5期で勉強会を快くお引き受けくださった山内利男様は、インドに25年もの間駐在されておいででした。残念ながら癌で他界されてしまいましたが、JISCに一つのメッセージを鉛筆書きで残して下さっています。「日印学生会議は期別毎に更新されて、毎期の編成別に独立した感が有りますが、インドの仕事は継続して長年かけて育成する継続性が最も重要です。是非実現してください。」01-09-18 山内利男 また、2001年8月30日には「ITは既に衰退の兆候がある。何故か？ それはITを盾にして、寧ろ見知らぬ相手と交信を楽しむ人間味の欠落が原因である。私の主張する素顔の見える付き合いが、真のITを復活する。」と御著書に執筆しておいでです。メッセージにありました「継続」、そして「顔を会わせての人と人との心の繋がり」が育むものを、JISCの活動が目指すものとし続けたいと思います。

ニガム先生・NKK をはじめとするコルカタの皆様、ランガナタン氏・スリラム氏・ABK AOTS DOSOKAI をはじめとするチェンナイの皆様、故ヴァルマ先生・JNU の先生方・チャウラ先生を始めとするデリーの皆様には、創設以来大変お世話になり心より感謝するばかりです。日本インド学生会議に参加して下さった両国の学生メンバーだけではなく、ご協力いただいた多くの皆様の記憶にも残り続ける活動となり、成長しつつ末永く継続できますよう、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

「わざわざ来なくてもいいですよ」

頼みたいことがあったり、協力頂いたことでやりたかったことが実現できた時に報告をしようと連絡をとるとそういわれることがあります。そんな時「そうか。わざわざしようとしていたんだ。」と自分で自分の行為に気がつきます。

僕は、わざわざ時間をつくり、わざわざ移動し、わざわざ会いに行く。
相手の人は、わざわざ会いに来る僕に対して、わざわざ時間をつくって迎える。
気を使わなくてもいいよ、ということかもしれないし、こんなこと私にさせないでくれ、ということかもしれません。

でも僕は、その全部のわざわざをすることを望み、相手にそのわざわざを求めていたのか。ということに気がつくのです。

そんな言葉に「いえ、わざわざしたいのでさせてください。」と返すとちょっと驚きながら大抵笑って「いいですよ。来てください」と迎えてくれます。

スマートフォンを数秒いじれば相手にメッセージを送れる、どこからでも電話ができる、パソコンを通じて会わなくても顔をみて会議ができる。今はそんな環境があります。
わざわざしたいのには、わけがあるんです。

僕は、会って、相手の顔を見て、僕の言葉で、直接伝えたいことがあったんです。
そして、聞いてもらって、表情の変化をみながら、言葉が返ってくるのを待ちたかったんです。そうすることで、自分と相手の気持ちを通わせて、次の何かに進みたかったんです。

私たち日本インド学生会議は、わざわざインドへ赴き（インド人学生は日本へ赴き）、インド人学生と話に行きます。そして、それをするために様々な方へ協力を依頼します。

わざわざ会って話すこと。このことに意義と価値を感じてきたからこそ日本インド学生会議は続いてきたのだと思いますし、多くの方がその意義や価値を知っているからこそご支援を頂き、わざわざ会って話す機会を頂いて来れたのだと思っています。

私自身、会って話すことの意義や価値を日本インド学生会議で多く学ばせていただきました。引き続き一人でも多くの日本の学生とインドの学生が出会い、話す機会に恵まれるようお力添えくださいますようこれからもどうぞよろしくお願い致します。

3. 実行委員メンバー一覧

【日本側】

	名前	役職	所属
1	中村 恒輝	委員長	東京大学 教養学部 文科一類 2年
2	新田 杏奈	副委員長 広報局長	青山学院大学 法学部 法学科 3年
3	川瀬 承	財務局長	拓殖大学 商学部 経営学科 3年
4	葛原 南美	学術・企画局長	宇都宮大学 国際学部 国際社会学科 3年
5	水谷 亮太	国内渉外局長	慶応義塾大学 経済学部 経済学科 4年
6	右田 淳一	国際渉外局長	東京大学 教養学部 文科二類 2年
7	安達 亮太	広報局員	慶応義塾大学 経済学部 経済学科 4年
8	土屋 直之	国内渉外局員	東京大学 教養学部文科 文科二類 2年
9	酒井 美和	国際渉外局員	筑波大学 社会・国際学群国際総合学類 2年
10	小泉 晴香	国際渉外局員	宇都宮大学 国際学部 国際文化学科 3年

計 10名

※酒井はコルカタ会議8月19日まで

【インド側】 : Calcutta students

	Name	Position	School/Major
1	Madhubarna Dhar	President	St.Xavier's College Sociology
2	Medha Goswami	Vice President Academics	IGNOU Psychology
3	Barshana Panigrahi	Vice President Cultural	Jogamaya Devi College English
4	Dipanjan Dey	Vice President Finance	Calcutta University Accountancy
5	Arnab Chakrabarti	Vice President Event Management	Calcutta University Bio-Science General
6	Aaleya Chanda	Communicator	Tokyo International University Japanese Language
7	Pinakpani Mukherjee	Academics Member	Jadavpur University Chemical Engineering
8	Sneha Dasgupta	Academics Member	Jadavpur University Film Studies
9	Aindrila Paul	Academics Member	Calcutta University English
10	Kausumi Saha	Academics Member	St.Xavier's College Sociology
11	Smaran Basu	Cultural Member	Calcutta University English
12	Oindrila Pal	Cultural Member	Rabindra Bharati University Western Music
13	Maharshi Bhaduri	Cultural Member	St.Thomas College of Engineering and Technology Electrical Engineering

14	Binay Hela	Finance Member	Calcutta University Accountancy
15	Krishnendu Ghosh	Finance Member	B.E.S.U Robotics
16	Mainak Mukherjee	Finance Member	Jadavpur University Animation and Multimedia Designing
17	Arunasish Sen	Event Management	St.Xavier's College English
18	Shreya Mukhopadhyay	Event Management	Calcutta University Psychology
19	Debarati Basu	Event Management	Jadavpur University History
20	Shreya Bose	Event Management	Calcutta University Geology

Total:20students



With Calcutta's member

第一部

日本インド学生会議

JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE

1. 基本理念	30
2. 概要	32
3. 沿革	34



1. 基本理念

「学生の学生による国際社会の将来のための会議」をモットーとする、私ども日本インド学生会議の主たる目的は以下の通りであります。

1、学生という立場を存分に生かした、既存の概念や営利関係、特定の政治・宗教にとらわれない自由かつ建設的な直接討議を通じ、世界の諸問題について新たな意見、解決策を導き出し、自ら実行するとともに、それを社会に報告・提案する。

2、上記のような討議に限らず、日本とインド両国の学生が寝食をともにする本会議の全日程、またそこまでの準備期間を通じて、両国の学生が直接的な交流をすることにより、お互いの社会、文化、価値観、考え方などについて認識・理解をし、それらを社会に発信する。

現在、私たちが生活するこの地球上では、環境問題・内戦・経済摩擦・人権侵害・人種差別など様々な問題が起こっています。そんな中、次世代を担う我々学生は、このような問題に対して真剣に取り組まなくてはならないと考えます。そこで、当団体は「日本とインドの学生による会議」というかたちで、解決の道を模索していきたいと考えています。

まず初めに、学生という社会的・営利的・政治的なものから自由な立場の我々は、専門家やビジネスマン、政治家ではすることのできない、より直接的で草の根的な会議をすることが可能であります。当団体はその利点を存分に生かした、政治家や専門家の「縮小版」にならない会議を目指しています。その一方、いくら「草の根」とは言え、私どもと対話するのは、インドの学生という一部の上流階級の若者ではあります。しかし、彼らは確実にインド社会を変えていける存在として、非常に意味があるものだと考えています。次に、何故インドなのでしょう？インドは複雑に民族・宗教が絡み合う、他に類を見ない多様性に富んだ国であり、同じアジアでも日本とは全く違った文化・社会を持っています。そのようなインドからは新たな道を探ること、新たな価値観を学ぶことができるのです。また、現在、日本とインドはわずかな政治的・経済的關係を除き、文化的・精神的交流つまり人と人との交流は著しく乏しい状況にあり、お互い

に誤解、偏見が至る所でみられます。私どもは、一年間の準備期間も含め「会議」というものを通して生身のインド人、インド文化を体験することができます。そして以上のような成果で自分たちが成長するのはもちろんのこと、これらを社会に報告・提案することによって、国際社会に貢献することが当団体の最終目標であります。私どもは、社会からの助成・支援を受けて活動しているという自分たちの「公的性格」を認識し、社会還元への模索を続けていきます。



2. 概要

名称	日本インド学生会議（英語名：Japan-India Student Conference）
設立年月	1996年8月
創設発起人	石津達也、長浜浩子、後藤千枝
顧問	近藤正規
組織構成	実行委員会、OBOG会、創設発起人（3名）、顧問（1名） （実行委員会…参加資格は大学、大学院、短期大学、専門学校 に所属する学生）
協力団体	インド側パートナー
団体目的	日本とインドの学生同士の討議や交流を通じて、お互いの社会、文化、 価値観などを理解し合うことで、学生という立場での日印友好関係を築く。 そして討議結果や交流の体験を社会に発信し、国際社会に貢献する。
活動概要	事前活動…組織運営、勉強会 本会議…学生同士のディスカッション、ホームステイ、 フィールドワーク、文化交流（毎年日本、インドのどちらかで開催する。） 事後活動…報告書作成、報告会開催、次期実行委員募集週に1回ほど定期的 にミーティングを行う。
発行物	機関誌、活動報告書
広報活動	ホームページ、Twitter、Facebook

日本インド学生会議は1997年のコルカタ大会を第1回目として始まり、2012年で第16回目を迎えます。2001年にデリー大会が始まり、2009年から始まったチェンナイ大会も現在まで続いています。ブネーで開催したこともあり、2012年はバンガロールにも訪れました。このように、開催年によって開催場所や内容は変わります。運営は実行委員である学生が行っています。OBOG会、創設発起人、顧問からの助言を受け、学生でありながら、日本とインドを結ぶ団体としての意識をもって活動しています。対外活動としては、一人でも多くの方に日本インド学生会議を知っていただくため、多くの人にインドに関心を持っていただくために、講演会やイベントの開催などを行っております。また、社会と接点を持って活

動していくために、財団や企業、その他国際交流団体などへ積極的に渉外活動をしております。他の同じような志を持つ学生会議団体とも交流を図り、お互いに切磋琢磨しております。



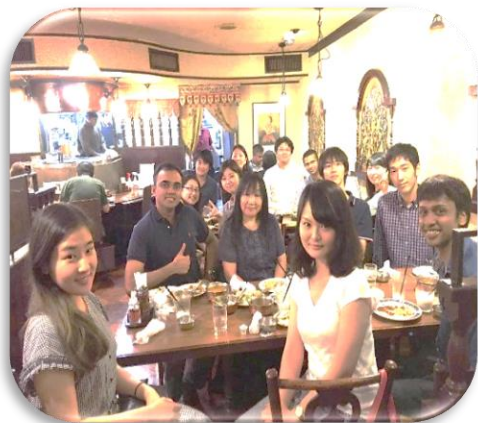
日本での活動の様子

◀定例ミーティング



▲特別勉強会

日本国語国文学会 60 周年記念大会に参加
於：青山学院大学



▲渡印前の壮行会

OBOG の方々と

3. 沿革

沿革 (2016年12月現在)

1996年 8月 日本インド学生会議創設事務所発足
(石津達也、長浜浩子、後藤千枝)

第1期

1996年 10月 第1期日本インド学生会議実行委員会発足
11月 臼田雅之氏(東海大学文学部教授)顧問就任

1997年 3月 カルカッタに第1回先遣隊派遣

8月 **第1期日本インド学生会議本会議**

(於:カルカッタ 8月2日~9月11日)

11月 第1期本会議報告会開催

第2期

1997年 11月 第2期日本インド学生会議実行委員会発足

1998年 1月 (財)アジアクラブ主催 沖守広氏写真展参加

2月 機関紙第1号発行

3月 カルカッタへ第2回先遣隊派遣

4月 (財)国際教育財団より助成金給付第1回総会開催

(各種規約施行)

6月 (財)三菱銀行国際財団より助成金給付

機関紙第2号発行

7月 会議前合宿

8月 **第2期日本インド学生会議本会議**

(於:カルカッタ 8月5日~15日)

9月 (財)吉田茂国際基金より助成金給付

10月 (財)アジアクラブ主催イベント

インド政府観光局主催イベント「ナマステ・インディア」参加

第2期本会議報告会開催

第3期

- 1998年 11月 第3期日本インド学生会議実行委員会発足
機関紙第4号発行
- 12月 「再考・JISCの基本理念」討論会第1回開催
- 1999年 2月 「同上」討論会第2回開催
- 3月 機関紙第5号発行
- 4月 (財)国際教育財団より助成金給付
- 6月 カルカッタへ第3回先遣隊派遣
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
- 8月 福永正明氏(拓殖大学)顧問就任
機関紙第6号発行
- 9月 本会議直前合宿
- 10月 第3期日本インド学生会議本会議
(於:東京10月2日~13日)
機関紙第8号発行
「ナマステ・インディア」参加
- 12月 第3期本会議報告会開催
第3回総会開催

第4期

- 1999年 12月 第4期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2000年 1月 「第1回学生会議連絡協議会フェア」参加
JISC公式ホームページ作成
- 2月 日本インド学生会議メーリングリスト作成
- 4月 機関紙第9号発行第4回総会開催
「学生会議連絡協議会合同新歓」(SCNフェア2000)参加
- 5月 (財)日印協会主催
「川岸前カルカッタ総領事のお話を聞く会」出席
- 6月 バラーナス・ヒンドゥー大学ヤーダヴ教授
を迎えてのヒアリング開催
(財)三菱銀行国際財団・(財)吉田茂国際基金より
助成金給付
機関紙第10号発行

8月 機関紙第 11 号発行

本会議団結式・壮行会開催

第 4 期日本インド学生会議本会議

(於：カルカッタ 8 月 7 日～26 日)

9 月

(財) 日印協会主催「森総理南西アジア訪問」講演会出席
帰国報告会主催

10 月 「ナマステ・インド」参加

(財) インドビジネスセンター主催

「日印 IT シンポジウム」参加

(財) 日印協会主催「駐日インド大使午餐会」出席

11 月 国際基督教大学学園祭参加

インド側発起人モハン・ゴーシュ氏を囲む会
主催

機関紙第 12 号発行

「学生会議連絡協議会合同報告会」参加

12 月 第 4 期本会議報告会開催

駐日インド大使アフターブ・セート閣下講演会開催

第 5 回総会開催

第 5 期

2001 年 1 月 第 5 期日本インド学生会議実行委員会発足

2 月 デリー側チャウラ先生、トマル先生を囲む会開催

4 月 SCN フェア 2001 参加

(財) 国際教育財団より助成金給付

5 月 機関紙第 13 号発行日印議員連盟訪問

外務省アジア大洋州局南西アジア課 訪問

6 月 山内利男氏を招いてのヒアリング勉強会開催

日印経済委員愛甲次郎氏による講演会主催

岐阜女子大学南アジア研究センター主催

「日印 IT シンポジウム」参加 協力

7 月 機関紙第 14 号発行

(財) 三菱銀行国際財団より助成金給付

直前合宿
国際交流基金より助成金給付
福永正明氏顧問退任

8月 第 5 期日本インド学生会議本会議

(於：デリー・コルカタ 8 月 2 日～23 日)

9月 帰国報告会開催

(財) 吉田茂国際基金より助成金給付

10月 「ナマステ・インディア」参加

11月 亜細亜大学学園祭参加機関紙第 15 号発行

12月 第 5 期本会議報告会開催第 6 回総会開催

第 6 期

2002 年 1 月 第 6 期日本インド学生会議実行委員会発足

2 月 第 3 期メンバーからのヒアリング

3 月 機関紙第 16 号発行

4 月 小野基先生（筑波大学教授）からのヒアリング開催

SCN フェア 2002 参加

在インド大使館後援名義受理

(財) 国際教育財団より助成金給付

5 月 保坂俊司氏（麗澤大学）顧問就任

(株) インドビジネスセンター後援名義受理

6 月 勉強会集中合宿

7 月 国交樹立 50 周年記念行事インドメラーに参加

(財) 日印協会後援受理

(財) アジアクラブ後援名義受理インドセンター後援受理

外務省後援名義受理

8 月 コルカタ、デリーに先遣隊派遣

9 月 本会議直前合宿

(財) 日商岩井国際交流財団より助成金給付

(財) 吉田茂国際基金より助成金給付機関紙第 17 号発行

10 月 (財) 国際交流基金より助成金給付

(財) 東京都国際交流財団より助成金給付

第 6 期日本インド学生会議本会議

(於：東京 10 月 18 日～31 日)

12 月 第 6 期本会議報告会開催

第 7 期

2002 年 12 月 第 7 期日本インド学生会議実行委員会発足

2003 年 1 月 第 7 期日本インド学生会議「本会議案」作成

3 月 機関紙第 18 号発行

4 月 実行委員交流合宿

SCN フェア 2003 参加

5 月 (財) 国際教育財団より助成金給付

6 月 (財) 国際交流基金より助成金給付勉強会合宿

(分科会案作成)

学生会議連絡協議会情報交換会参加

(財) 日印協会より後援名義受理

デリー・コルカタに先遣隊派遣

7 月 機関紙第 19 号発行

(財) 三菱銀行国際財団より助成金給付

(財) 吉田茂国際基金より助成金給付

(財) 日商岩井国際交流財団より助成金給付

8 月 本会議直前合宿関係者挨拶回り

第 7 期日本インド学生会議本会議

(於：デリー・コルカタ 8 月 9 日～9 月 2 日)

10 月 報告書作成

小学校訪問 (社会還元事業) 計 4 回

「ナマステ・インディア」参加

(財) 東京都国際交流財団より助成金給付

11 月 第 7 期本会議報告会開催

「インドの魅力を発見する会」主催

パネルディスカッションに参加

12 月 第 7 期本会議報告会開催

第 8 期

2003 年 12 月 第 8 期日本インド学生会議実行委員会発足

2004 年 1 月 第 8 期日本インド学生会議「本会議案」作成

学生会議総会開催

2 月 ミーティング開始

3 月 大使館主催のパーティーに参加

4 月 機関紙第 20 号発行

OB・OG との懇親会

第 8 期募集〆切 (4 月末)

SCN フェア 2004(29 日)参加

5 月 メンバー交流合宿(9、10 日)

(財) 吉田茂国際基金より助成金給付

(財) 国際教育財団より助成金給付

(財) 日商岩井億歳交流財団より助成金給付

7 月 機関紙第 21 号発行

本会議前直前合宿(31 日、8 月 1 日)

8 月 **第 8 期日本インド学生会議本会議**

(於：デリー・コルカタ 8 月 11 日～30 日)

在コルカタ日本総領事館より後援名義受理

10 月 第 9 期実行委員募集開始

「ナマステ・インド」参加 (16、17 日)

小学校訪問 (社会還元事業) 報告書作成 (10 月末発行)

11 月 第 8 回日本インド学生会議報告会開催 (28 日)

第 9 期

2004 年 12 月 第 9 期日本インド学生会議実行委員会発足

2005 年 1 月 本会議案作成

2 月 助成金申請・後援名義の申請開始

3 月 新人勧誘開始

4 月 SCN フェア 2005(29 日)に参加

5 月 ミーティング開始

OBOG インタビュー実施

6 月 合宿実施

7 月 分科会トピック決定

8 月 ミーティングを週 2 回に変更

本会議直前合宿 (11・12 日)

日本インド学生会議機関紙発行

第 9 期日本インド学生会議本会議

(於：東京 8 月 28 日～9 月 12 日)

9 月 第 9 期日本インド学生会議本会議終了 (12 日)

コルカタ側メンバー帰国 (13 日)

デリー側メンバー帰国 (14 日)

10 月 報告書作成開始

日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2005」協力

(1・2 日)

11 月 報告書作成

12 月 第 9 回日本インド学生会議本会議報告会 (11 日)

第 10 期

2005 年 11 月 第 10 期日本インド学生会議実行委員会発足

2006 年 1 月 本会議案作成

2 月 助成金申請・後援名義の申請開始

3 月 新人勧誘開始 ミーティング開始

4 月 SCN フェア 2006 参加

5 月 合宿実施 (26・27 日)

6 月 インド大使就任パーティー

先遣隊派遣 (10 日～19 日)

合宿実施 (23・24 日)

7 月 上方舞友の会、吉村桂充様訪問

8 月 シン大使就任パーティー

第 1 回インド知識経済勉強会参加

第 10 期日本インド学生会議本会議

(於：ブーネ・コルカタ・デリー 8 月 24 日～9 月 19 日)

9 月 日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2006」に協力

(23・24 日)

10 月 インディアンデイ開催(28 日)

11 月 報告書作成

12 月 第 10 回日本インド学生会議本会議報告会 (26 日)

第 11 期

- 2006年12月 第11期日本インド学生会議発足
(以降毎週土曜ミーティング実施)
事業計画書・予算案作成、財団渉外・申請
- 2007年1月 事業計画書・予算案作成、広報(新メンバー募集)
アイセック主催インド勉強会参加(7日)
財団渉外・申請
- 2月 広報(新メンバー募集)
後援渉外・申請
- 4月 (財)国際教育財団より助成金給付
- 5月 財団申請
(財)日商岩井国際交流財団(財)吉田茂国際基金より
助成金給付
- 6月 OBOG 会主催 第1回 JISCDAY(30日)
合宿実施(30日・7月1日)
在インド日本大使館、在コルカタ総領事館、
在ムンバイ総領事館より後援名義受理
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
- 7月 勉強会、模擬ディスカッション
先遣隊派遣ブネー・デリー(29日～8月4日)
外務省より後援名義受理
日印交流年イベントとして認定
日印交流年実行委員より助成申請受理
(財)国際交流基金デリー実行委員より協賛申請受理
- 8月 直前合宿実施(12日・13日)
第11期日本インド学生会議本会議
(於:コルカタ・ブネー・デリー 8月15日～9月7日)
- 9月 本会議終了(9月7日)、反省会
日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2007」協力
(29日・30日)
- 10月 報告書作成、12期準備
- 11月 報告書完成第11期日印学生会議報告会実施
(3日オリンピックセンターにて)

第 12 期

2007 年 11 月 第 12 期日本インド学生会議実行委員会発足

第 11 期メンバーからのヒアリング

各種資料作成（事業計画書・予算書など）

第 1 次京都先遣隊派遣

IIT 同窓会講演会（於：慶應義塾大学）を補助

12 月 国際開発研究者協会（SRID）学生部にて

講演第 1 次勉強会合宿

財団助成・後援の申請開始

2008 年 2 月 日本インド学生会議 OBOG 総会

3 月 第 2 次勉強会合宿

（財）日印協会後援名義受理

4 月 学生会議合同説明会

（日印・日越・日韓・日中・日ケ）実施

外務省後援名義受理

5 月 インドセンター後援名義受理京都府後援名義受

第 2 次京都先遣隊派遣本会議直前合宿

（財）日商岩井国際交流財団より助成金給付

第 12 期日本インド学生会議本会議

（於：東京・京都 5 月 29 日～6 月 11 日）

6 月 （財）日印協会より助成金給付

7 月 （財）吉田茂国際基金より助成金交付

8 月 報告書完成 第 12 期本会議報告会実施

第 13 期

2008 年 10 月 第 13 期日本インド学生会議実行委員発足

11 月 第 12 期メンバーからのヒアリング

実行委員の募集

12 月 学生会議合同講演会の企画と実施

（日中学生会議、日露学生会議と協働）

2009 年 1 月 実行委員の募集

定例会

2 月 日本インド学生会議 OBOG 総会

学生会議合同講演会の企画と実施

(日中学生会議、日露学生会議と協働)

取材 (メンターダイヤモンド学生記者クラブより
ウェブ記事の取材)

3月 学生会議評議会の合同イベントの企画と実施

予算案の見直し

(財)日印協会後援名義受理

(財)双日国際交流財団助成金給付

(財)吉田茂国際基金助成金給付

4月 (財)国際交流基金助成金給付

学生会議評議会合同説明会実施

外務省後援名義受理

在インド日本国大使館後援名義受理

在コルカタ日本国総領事館後援名義受理

在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理

5月 日本インド学会議 OBOG 会主催

「キャリアエクステンジ」参加

学生会議評議会交流会

学生会議合同講演会の企画と実施

(日中学生会議、日露学生会議と協働)

於：東京大学 5 月祭

6月 (財)三菱 UFJ 国際財団より助成金給付

学生会議合同勉強会

(日中学生会議、日露学生会議と協働)

勉強会合宿

7月 合宿

8月 先遣隊派遣(8月5日～)

第 13 期日本インド学生会議本会議

(於：コルカタ・チェンナイ・デリー 8月17日～9月7日)

9月 ナマステインディア 2009 出店 報告書作成

10月 報告書作成、決算報告

財団渉外、14期引き継ぎ準備

- 11月 第13期報告会実施
学生会議評議会合同報告会実施
第14期引き継ぎ

第14期

- 2009年12月 第14期日本インド学生会議実行委員会発足
第13期メンバーからのヒアリング財団渉外
各種資料作成（事業計画書・予算書など）定例会
- 2010年1月 日本インド学生会議 OBOG 総会
メンバーリクルーティング
定例会
- 2月 財団渉外
SCN ミーティング定例会
- 3月 SCN イベント
予算案見直し
(財)日印協会後援名義受理
(財)双日国際交流財団助成金給与
(財)吉田茂国際基金助成金給与
- 4月 (財)国際交流基金助成金給与
分科会（勉強会）
合宿実施（10日・11日）
SCN イベント（25日）
- 5月 SCN 交流会（27日）
文化交流会（日舞・ダンス練習）
合宿実施（15日・16日）
入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6月 ソフトブリッジソリューションズ訪問（25日）
(財)三菱 UFJ 国際財団より助成金給付
- 7月 在インド日本国大使館 後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
分科会（勉強会）
合宿実施（3日・4日）

直前合宿実施 (31 日・8 月 1 日)

8 月 先遣隊派遣 (8 月 8 日～)

第 14 期日本インド学生会議本会議

(於：コルカタ・チェンナイ・デリー8 月 14 日～9 月 4 日)

9 月 「ナマステ・インディア 2010」協力

報告書作成

10 月 報告書完成 決算報告

財団渉外

第 15 期引き継ぎ準備

11 月 第 14 期報告会実施 (14 日、オリンピックセンターにて)

12 月 第 15 期引き継ぎ

第 15 期

2010 年 12 月 財団渉外

各種資料作成 (事業計画書・予算書など)

2011 年 1 月 メンバーリクルーティング

第 15 期日本インド学生会議実行委員会発足

第 14 期メンバーからヒアリング

2 月 財団渉外

3 月 東日本大震災により活動休止

4 月 予算案見直し

5 月 入会希望者へのオリエンテーション実施

6 月 (財) 三菱 UFJ 国際財団より助成金給付

合宿オリンピックセンターにて (10・11 日)

7 月 外務省後援名義受理

株式会社インド・ビジネス・センター後援名義受理

8 月 独立行政法人国際交流基金後援名義受理

JICA 後援名義受理

公益財団法人日印協会後援名義受理

9 月 本会議直前合宿オリンピックセンターにて (3 日)

経済産業省後援名義受理

在日インド大使館後援名義受理

第 15 期日本インド学生会議本会議

(於：東京 9 月 10～21 日)

「ナマステ・インディア 2011」協力報告書作成

- 10 月 報告書作成財団渉外
第 16 期引き継ぎ準備
- 11 月 報告書完成決算報告
第 15 期報告会実施 (26 日、東京大学にて)
- 12 月 第 16 期引き継ぎ

第 16 期

2011 年 12 月 財団渉外

2012 年 1 月 メンバーリクルーティング

2 月 入会希望者へのオリエンテーション

3 月 第 16 期日本インド学生会議実行委員会発足
第 15 期メンバーからヒアリング

4 月 (財) 双日国際交流財団助成金給与
(独) 国際交流基金助成金給与
予算案の見直し

定期勉強会開始

ブログ更新開始

新歓イベント参加 主催

: 国際協力学生プラットフォーム「絆」(15 日)

新歓説明会 (29 日)

インド側とやり取り開始

5 月 新歓イベントビラ設置 主催

: YDP Japan Network (5 日)

バンガロール訪問決定

国交樹立 60 周年記念イベント認定

(財) 三菱 UFJ 国際財団助成金給与

6 月 笹井大嗣氏からのヒアリング

機関誌第 1 号発行

参加メンバー確定 (リクルーティング終了)

事前合宿実施 (30 日・7 月 1 日)

7 月 国際交流基金ニューデリー

日本文化センター後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
(財) 日印協会後援名義受理
中津雅昭氏による勉強会

8 月 機関誌第 2 号発行

在日本インド大使館後援名義受理

第 16 期日本インド学生会議本会議

(於: コルカタ、チェンナイ、バンガロール、デリー)

9 月 ナマステ・インディア 2012 協力

報告書作成開始

10 月 財団渉外

報告会準備

11 月 報告書完成

第 16 期報告会 (於: 東京外国語大学 10 日)

総会

機関誌第 3 号発行

第 17 期

12 年 12 月 メンバーリクルーティング、財団渉外

2013 年 1 月 第 17 期日本インド学生会議実行委員会発足メンバーリクルーティング

2 月 本会議案作成、メンバーリクルーティング、定期勉強会、
インド側との調整開始

日本イスラエルパレスチナ学生会議との合同イベント

3 月 合宿、事業計画書見直し、本会議プログラムの検討、広報

4 月 (財) 双日国際交流財団助成金給与

(独) 国際交流基金助成金給与

参加者決定、分科会議題決定、

本会議プログラムの検討

機関紙発行

5 月 実行委員参加締切、広報、後援申請

本会議日程・内容最終調整

- (財) 三菱 UFJ 国際財団助成金給与
- 6月 合宿
- 7月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
在日本インド大使館後援名義受理
- (財) 日印協会後援名義受理
- 事前合宿
- 機関誌第2号発行
- 8月 **第17期日本インド学生会議本会議**
(於：デリー、コルカタ、バンガロール、チェンナイ 8月6日～9月4日)
- 9月 ナマステ・インディア 2013 協力
報告書作成開始
第18期実行委員募集開始
- 10月 財団渉外
報告会準備
- 11月 報告書完成
第17期報告会
機関誌第3号発行(予定)
- 12月 第17期第2回報告会
総会

第18期

- 2014年3月 (財)三菱 UFJ 国際財団助成金給与
- 5月 (財)双日国際交流財団助成金給与
メンバーリクルーティング(17期)
- 6月 第18期日本インド学生会議実行委員会発足
メンバーリクルーティング
- 7月 本会議案作成
定期勉強会
インド側との調整開始、
実行委員参加締切

- メンバー決定
- 会議日程確定
- 8月 外務省後援名義受理
 - (財)日印協会後援名義受理
 - インド側メンバービザ取得準備開始
 - 分科会テーマ決定、定期勉強会開始
- 9月 公益社団法人
 - 在日インド商工協会後援名義受理
 - (独)国際交流基金後援名義受理
 - ディスカバーインディアクラブ後援名義受理
 - ナマステインディア 2014 協力
- 10月 在日インド大使館後援名義受理
 - 第 18 期日本インド学生会議本会議**
 - (於:東京 10 月 3 日～15 日)
- 11月 報告書作成開始
 - 第 19 期実行委員募集開始
 - 報告会準備
- 12月 第 19 期引き継ぎ

第 19 期

- 2015 年 4 月 メンバーリクルーティング (18 期)
- 5 月 (独)国際交流基金助成金給与
 - 第 19 期日本インド学生会議実行委員会発足
 - メンバーリクルーティング
- 6 月 メンバーリクルーティング
 - 事業計画書作成
- 7 月 (公財)三菱 UFJ 国際財団助成金給与
 - (公財)日印協会後援名義受理
 - 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 - 機関誌第 1 号発行
 - 実行委員参加締切・メンバー決定
 - インド側との交渉
- 8 月 (公財)双日国際交流財団助成金給与

在日本インド大使館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理

第 19 期日本インド学生会議本会議

(於:デリー、チェンナイ、コルカタ 8月12日～9月4日)

- | | |
|-----|---|
| 9月 | ナマステインドゥア 2015 協力
報告書作成開始
合宿実施 |
| 10月 | 財団渉外
報告会準備 |
| 11月 | 報告書完成
第 19 期日本インド学生会議報告会
第 20 期メンバーリクルーティング開始 |
| 12月 | 学生会議合同報告会 |

第二部

活動報告

Activity report

- | | |
|-----------|----|
| 1. 年間活動報告 | 52 |
| 2. 各局活動報告 | 53 |



1. 年間活動報告

第 20 期日本インド学生会議 年間活動 (2016 年 12 月現在)

- 2015 年 12 月 第 20 期メンバーリクルーティング開始
- 2016 年 3 月 公益財団法人双日国際交流財団 助成決定
- 4 月 第 20 期日本インド学生会議実行委員会発足
第 20 期事業計画書作成
- 5 月 公益財団法人三菱 UFJ 国際財団 助成決定
独立行政法人国際交流基金 後援決定
「地域リーダー・若者交流助成プログラム」採用
公式ホームページリニューアル
- 6 月 全国大学国語国文学会 60 周年記念大会参加
エアインディア社日本支社訪問
- 7 月 機関誌発行
公益財団法人日印協会 後援決定
Embassy of India, Tokyo(Japan) 後援決定
- 8 月 在インド日本国大使館 後援決定
第 20 期日本インド学生会議本会議
(於：インド 8 月 10 日～9 月 5 日)
- 9 月 ナマステインディア 2016 協力
- 10 月 第 20 期活動報告会
- 11 月 第 21 期メンバーリクルーティング (第一次)
- 12 月 第 21 期メンバーリクルーティング (第二次)
- 2017 年 1 月 第 20 期活動報告書発行

2. 各局活動報告

学術・企画局 (Academic)

局長：葛原南美

=概要=

企画学術局は渡印前のインドに関する勉強会の企画と運営、インドに関する本や映画、イベントの紹介、またメンバー同士の信頼を深めるための交流会の企画、運営。インドで披露する出し物の準備。また分科会の企画書やパワーポイント、報告媒体を先に作成しメンバーに共有、説明を行った。

=反省=

4月の時点からメンバーはほぼ揃っていたにも関わらず2回しか勉強会を行うことができなかった。というのもミーティングに出席する人が少なかったことが原因なので、みんなが集まらない時でもインドについて学べるような媒体をもっと積極的に紹介したら良かった。交流会やミーティング後のご飯も、もっと積極的に企画するべきだった。分科会に関する準備はインドで手間取ることがなかったので良かった。

国際渉外局 (International Relations)

局長：右田淳一

=概要=

インド側の学生コミュニケーターや顧問の先生と連絡を取ったり、インドに進出する日本企業の方に訪問の依頼をしたりした。

本会議中の訪問先や体験について、提案内容を実質的に決定する立場であり、メンバーの経験量の命運を握るという点で責任重大のポストといえる。

=反省=

ビジネスメールのマナーに則り、伝わりやすい文章を心がけて連絡を取っていた。緊急を要していない場合でも迅速に対応することが望ましく、普段からメールをこまめにチェックするようにしていた。これらの点に関して、必ずしも求められる水準で行えていなかったことは否めず、来期に向けてしっかりと引継ぎを行いたい。

国内渉外局 (Liaison in Japan)

局長：水谷亮太

＝概要＝

主に、大使館・総領事館・エアインディア社の方と連絡を取り合った。その過程で、後援申請名義使用許可申請・航空券手配を行った。また、インド滞在中にお世話になった方から報告書の巻頭メッセージの依頼なども行った。インドと日本は、地理的にも離れていて、メールなどを通じた事務的な連絡はとても重要であり、貴重な経験をすることが出来た。

＝反省＝

後援申請名義使用許可申請の際には、前年度と形式が変更されていた部分を見落としてしまい、迷惑をかけてしまった。また、提出期限に対してもっと余裕をもって行動する必要があったと感じた。20年間、OB・OGの方が築いて下さった様々な人との信頼関係を次の代に繋げていくという意識をより強く持って行動することも大切であると感じた。

財務局 (Financial Bureau)

局長：川瀬承

＝概要＝

財務局は、日本インド学生会議の会議運営に関する財務管理全般を担当している。本会議開催の準備に当たり、助成団体からの助成金受領を行い、インドでの本会議開催の支出費用を計算する。本会議中は本会議開催中に発生する滞在費や、交通費、食費を一括で管理を行う。また、助成団体との窓口や、財務資料の作成を行う。

＝反省＝

本会議終了後、助成団体への書類提出の期限遅れを起こしてしまったことが、大きな反省である。インド滞在中は問題なく勤められたことが、何よりもよかった。

広報局 (Public Information)

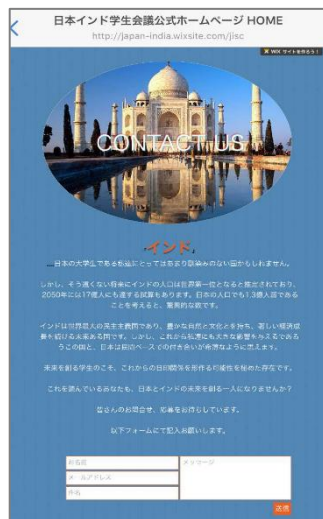
局長：新田 杏奈

＝概要＝

広報局は、機関誌並びに報告書の発行、また JISC の活動を知って頂く為に Facebook や Twitter 等の SNS を用いた広報活動を行っている。中でも今期は JISC の活動が 20 年目の節目を迎えたので、HP を新たに立ち上げた。既存のデータを引き継ぎつつも、JISC の魅力が伝わるようにレイアウトをメンバーと考え工夫した。また、本会議開催中は広報局でその日の活動の記事を分担し、毎日インドでの活動の様子を発信できるように心がけた。

＝反省＝

本会議終了後、新たに機関誌を発行する予定であったが、報告書の編集に手間取った為、実現できなかった。また、報告書の編集も予定より遅れてしまった点なども今期の反省点の一つである。以上の反省点を踏まえて、今後計画的かつスムーズに広報活動が行えるように、次期メンバーへの引き継ぎを行いたいと思う。



▲今年度立ち上げた新規ホームページ

<http://japan-india.wixsite.com/jisc>

第三部

本会議活動報告

Plenary session activity report

1. 実施要項	57
2. 本会議日程	60
3. 本会議日録	61
4. 在外公館・企業訪問報告	85
5. 分科会報告	109
6. 文化活動報告	134
7. ホームステイ報告	140
8. 修了書	143

1. 実施要項

《第 20 期日本インド学生会議 実施要項》

事業名： 第 20 期日本インド学生会議

主催： 第 20 期日本インド学生会議実行委員会

開催期間： 2016 年 8 月 10 日（水）～9 月 5 日（火）

開催地： コルカタ 8 月 10 日（水）～18（木）

チェンナイ 8 月 19(金)～27 日(土)

デリー 8 月 28（日）～5 日（月）



助成： 独立行政法人 国際交流基金

公益財団法人 双日国際交流財団

公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団

後援： 独立行政法人 国際交流基金
公益財団法人 日印協会
在インド日本国大使館
在コルカタ日本国総領事館
在チェンナイ日本国総領事館
在日本インド大使館

協力： インド…コルカタ：日本語会話協会 (Nihongo Kaiwa Kyoukai)
チェンナイ：ABK-AOTS DOSOKAI
デリー：Prof. Ashok K. Chawla
(IJES 日本語学校 運営委員会 会長)
日本…顧問 近藤正規先生
創設発起人 長浜浩子先生
学生会議連絡協議会 (SCN)
日本インド学生会議 OBOG 会

参加学生：

日本

第 20 期日本インド学生会議実行委員メンバー

実行委員長	中村 恒輝	東京大学教養学部文科一類 2 年
副実行委員長/広報局長	新田 杏奈	青山学院大学法学部法学科 3 年
財務局長	川瀬 承	拓殖大学商学部経営学科 3 年
学術・企画局長	葛原 南美	宇都宮大学国際学部国際社会学科 3 年
国内渉外局長	水谷 亮太	慶應義塾大学経済学部経済学科 4 年
国際渉外局長	右田 淳一	東京大学教養学部文科二類 2 年
広報局員	安達 亮太	慶應義塾大学経済学部経済学科 4 年
国内渉外局員	土屋 直之	東京大学教養学部文科二類 2 年
国際渉外局員	酒井美和	筑波大学社会国際学群国際総合学類 2 年
国際渉外局員	小泉 晴香	宇都宮大学国際学部国際文化学科 3 年

コルカタ

President

Madhubarna Dhar

St.Xavier's College

VP (Academics)	Medha Goswami	IGNOU
VP (Cultural)	Barshana Panigrahi	Jogamaya Devi College
VP (Finance)	Dipanjan Dey	Calcutta University
VP(Event Management)	Arnab Chakrabarti	Calcutta University
Communicator	Aaleya Chanda	Tokyo International University
Academics	Pinakpani Mukherjee	Jadavpur University
	Sneha Dasgupta	Jadavpur University
	Aindrila Paul	Calcutta University
	Kausumi Saha	St.Xavier's College
Cultural	Smaran Basu	Calcutta University
	Oindrila Pal	Rabindra Bharati University
	Maharshi Bhaduri	St.Thomas College of Engineering and Technology
Finance	Binay Hela	Calcutta University
	Krishnendu Ghosh	B.E.S.U
	Mainak Mukherjee	Jadavpur University
Event Management	Arunasish Sen	St.Xavier's College
	Shreya Mukhopadhyay	Calcutta University
	Debarati Basu	Jadavpur University
	Shreya Bose	Calcutta University
<u>チェンナイ</u>		
Students of	IIT (Indian Institute of Technology) Madras	
	CIT(Chennai Institute of Technology)	
<u>デリー</u>		
Students of	Jawaharlal Nehru University/School of Language, Japanese	

2. 本会議日程

	場所	午前	午後	宿泊	
8/10(水)	コルカタ	成田出発	デリー乗換、コルカタ到着	ラーマクリシュナミッション	
8/11(木)		自由時間	開会式		
8/12(金)		文化交流会	分科会(1)		
8/13(土)			工場見学/NGO訪問	観光	ホームステイ
8/14(日)		ホームステイ			
8/15(月)		分科会(2)	分科会(3)/NKKparty		
8/16(火)			分科会(4)	自由時間	ラーマクリシュナミッション
8/17(水)		マザーハウスボランティア	自由時間		
8/18(木)		分科会結果発表	閉会式/さよならパーティ		
8/19(金)	移動	自由時間	コルカタ出発、チェンナイ到着	D&A	
8/20(土)		寺院観光	開会式		
8/21(日)	チェンナイ	日本語学校授業見学	ホームステイ	ホームステイ	
8/22(月)		ホームステイ	エリオットビーチ観光		
8/23(火)		日本文化祭(CIT)		D&A	
8/24(水)		総領事館訪問	JETRO訪問/分科会(1)		
8/25(木)		ヨガ体験	分科会(2)		
8/26(金)		カラクシェトラ観光	YAMAHA工場見学		
8/27(土)		マハーバリプラム観光	閉会式		
8/28(日)	移動	チェンナイ出発、デリー到着	自由時間	WBC (World Buddhist Center)	
8/29(月)	デリー	日本語学校訪問	朝日新聞社訪問		
8/30(火)		自由時間	大使館訪問/ICCR訪問/研究室訪問		
8/31(水)		マルチスズギ工場見学	東大デリー事務所訪問		
9/1(木)		三井物産訪問	国際交流基金訪問		
9/2(金)		JICA訪問	買い物(メインバザール)		
9/3(土)		アグラ観光			
9/4(日)		帰国	自由時間		デリー出発
9/5(月)	成田到着				

3. 本会議日録



KOLKATA(コルカタ)



8月10日(水) 中村恒輝

<予定>

①成田出発⇒デリー到着

②デリー出発⇒コルカタ到着 (Ramakrishna Mission Institute of Culture)

とうとう本会議1日目が始まった。日本からインドまでのフライトは9時間ほどとかなり長く、航空機の遅れもあってコルカタに到着したときには既に現地時間で深夜を回っていた。それにもかかわらずコルカタメンバー達が空港で温かく出迎えてくれたことに心から感謝している。メンバー達が空港で待機してくれたお陰で真夜中に日本人だけでインドにいるという不安感は大きく解消された。ただメンバー一同初日からかなり疲れているように思える。空港に到着したときには日本時間では午前3時を回っており、みな元気にインド側メンバーと歓談する気力は残っていないようだ。出国前はみなとても元気で期待が感じられたのだがやはり不安も大きいのだろう。打ち合わせを何度もしていたとはいえ慣れない国でメンバー達をまとめるのは個人的にはプレッシャーも感じる。



8月11日(木) 土屋直之

<予定>

①開会式

目を覚ます。どうも、異国にいても、朝の目覚めというのは憂鬱なものようだ。欠伸をかみ殺しつつ、瞼の上にやや寝不足特有の熱っぽさを感じながら、僕は部屋のカーテンを開けた――

そこでまず、目に飛び込んできたのは、謎の文字が書かれた看板（のちに、ベンガル語だと判明するのだが）。昨晚、宿に着いた時には、とうに真夜中を回っていた。だから気づかなかった。そしてこの時、僕はようやく自分がインドにいるのだということを実感したのである。

さて、今日のスケジュールは、開会式。式自体は、終始厳かに執り行われた。お互いに式辞を述べ、そして出し物を行う。日本側は、委員長中村が代表としてスピーチを行った（これがのちに passion として「伝説の」スピーチになるのだが）。そして、出し物は合唱「世界に一つだけの花」とソーラン節。終わると、乾いた空気を一閃するような拍手を受けた。インド側の出し物も素晴らしかった。特に、合唱「花は咲く」。今でも「音の記憶」が甦ってくる。



8月12日(金) 酒井美和

<予定>

- ①文化交流会
- ②分科会 (1)

ジャダプール大学にて、午前は文化交流会、午後は1回目の分科会を行った。分科会では、日本人側はオープニングセレモニーで披露したソーラン節をインド人メンバーにレクチャーした。皆、少し恥ずかしそうであったが楽しんでいただようであった。イ

インド人側は、日本人メンバーにメヘンディを施してくれ、女子メンバーにはサリーを着つけてくれた。憧れのインド文化を体験でき、非常に貴重な体験ができた。

分科会は初回から、準備してきたプレゼント、ディスカッションを行った。日本人だけではでない意見を聞くことができ、インドの教育システムを知るのによい機会となった。



8月13日(土) 葛原南美

<予定>

①工場見学/NGO 訪問

②市内観光 (教会、ガンジス河)

8時過ぎにはパッキングを済ませてロビーに集合した。ホームステイ先で使う荷物だけ持ち、それ以外は荷物置き場として残しておいた一部屋に置いて出かけた。スクールバスと書かれた貸し切りのバスにインド人も日本人も乗り込み40分くらい離れたHitachiの工場見学へ。最初にオフィスの商品を見せてもらった後、1時間程工場内の説明を受けながら見学。その後Child Care Homeという女性を支援しているNGOを訪問し、施設内を見た後、子ども達が踊りを披露してくれた。その後子ども達と交流した後、バスに戻り昼食。その後、カトリック系の教会に行きゆっくり見て歩いた。その後、ガンジス河のほとりへ。

ガンジス河と聞いて想像するのはヴァラナシの沐浴だったため、普通の風景にやや興ざめしたがオレンジの衣装をまとった集団がたくさん見えたため、やはり聖なる河なんだと再確認した。ほとりにあるアイス屋さんでアイスを食べた後、市内地にバスで戻り各々ホームステイ先へメトロやタクシーを用いて解散。



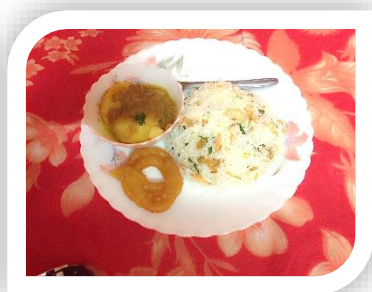
8月14日(日) 新田杏奈

<予定>

①ホームステイ

前日から、コルカタの女子大生、Barcaのお宅にホームステイさせて頂いた。予定は昼からであったので、たっぷりと睡眠をとることが出来た。両親ともにコルカタ郊外で働いていると聞いたが、たまたまお母さんが帰って来ていたので、Barcaのお母さんとおばあちゃんと弟さんに会うことが出来た。お昼ご飯は家政婦さんが部屋まで運んで来てくれた。チャーハンのような炒めご飯に、ごろっとしたジャガイモが入ったカレー。デザートには密をたっぷり含んで揚げた甘いドーナツ。見た目はシンプルだがとっても美味しかった。コルカタの家庭の味は大判振る舞いで、後から後から追加することができ、たっぷり堪能することが出来た。お昼から外出し、水谷君とMaharshiと合流し、4人で市内の観光に出かけた。最初に出かけたのは、コルカタでも有名なイギリス人兵士の墓地であった。大きな石で出来たお墓には苔が蒸しており、独特な雰囲気醸し出していた。墓地を後にすると、急に湿度が上がったように感じた。雲行きも怪しく、嫌な予感がしたが、その予感的中した。ぽつぽつと雨が降り始めたかと思うと、たちまちバケツをひっくり返したような雨が降り始めた。ものの数分で、雷雨がなり始め、町の道路はあちこち

が川のようになった。コルカタ国立博物館への観光も予定していたが、急遽取りやめ、「Café coffee day」というコーヒーショップで雨宿りすることになった。雨で冷えた体にあっかいコーヒーはとても美味しかった。夕方になると、雨も落ち着き始めたので、コルカタのバザールに買い物に出かけたりして過ごした。夜になると Pinak の家に各ホームステイ先に散っていたメンバーが続々と集まった。ビールを片手に踊ったり歌ったりしながら、コルカタのメンバーと親睦を深めることができて、とても楽しい夜になった。



8 月 15 日(月)

酒井美和

<予定>

①分科会(2)

②分科会(3)/NKK Party

午前、午後と分科会を行い、夜は NKK 設立記念パーティーに参加した。

一日中分科会を行うのはこの日が初めてであり、長時間にわたるものであったが、それぞれのプレゼンが非常に興味深く、議論も白熱したためあっという間であった。インド人メンバーとともに NKK 設立記念パーティーへ行き、学生会議メンバーも歌を披露した。インドで人々が歌や詩など人前で披露できるものを多く持っている点に魅力を感じ、音楽で人とのつながりが深くなるというのは本当だと確信した。この日は帰りが遅くなったにも関わらず、インド人メンバーが宿舎まで送り届けてくれ、彼らが毎日疲れたところを見せずに私たちとの時間を大切にしてくれていることに感謝の気持ちでいっぱいになった。



8月16日(火) 安達亮太

<予定>

①分科会(4)

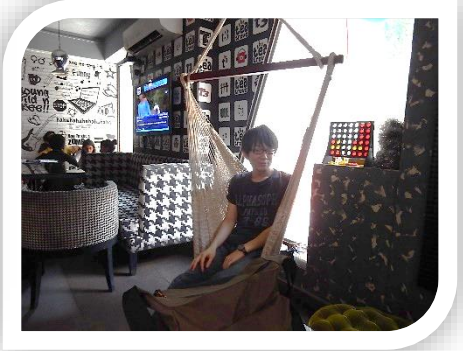
②アザド博物館見学



午前、アザド大学博物館へ。ここで分科会を行った後、マウラナ・アザド氏に関する史料が展示されている博物館を見学した。

昼食をとった後、カフェへと移動。このカフェではジェンガやUNO、チェスといったゲームが遊べるようになっており、ゲームを通してインド側のメンバーとの交流を深めた。

カフェにはハンモックもあった。皆疲れがたまっているようで、日本側のメンバーのうち何人かはカフェで眠ってしまっていた。カフェで頼んだレモネードは腐った卵の味がした。



8月17日(水) 小泉晴香

<予定>

- ①マザーハウスボランティア
- ②買い物

6時半出発。マザーハウスへ移動し、長年ボランティアをしているという日本人女性の案内を受け施設内へ。登録を終えて朝食の食パンとバナナ、そしてチャイをとる。朝食を摂り終え鐘が鳴ると、全員でお祈りを行ったのちシスターから説明を一通り受ける。マザーハウスが所有する5つの施設からランダムで自分の持ち場が与えられる。私たちの担当は日本の老人ホームの役割を果たしているプレムダン (Prem Dan) という名前の施設であった。施設までは徒歩で移動し、到着するとすぐに活動を開始する。事前に説明会へ参加できなかったため、ボランティア経験者やワーカーに指示を仰ぎつつ活動。男子は力仕事、女子は入居者の介抱やコミュニケーションをとった。想像していた神聖な雰囲気はどこにもなく労働という印象が強く、海外からやってきたボランティアがごった返している様子にはどこか異様なものを感じた。活動終了後は一時休憩をしたのち学生たちと「さよならパーティー」で着るサリーを買いにいった。コルカタのサリーのお店では、様々な色や模様のサリーが売っていて、選ぶのに迷い、時間がかかったが、最後には何とかお気に入りの1枚を決めることが出来、自分へのとてもいいお土産となった。



8月18日(木) 新田杏奈

<予定>

- ①分科会結果発表
- ②閉会式/さよならパーティー

早くも、コルカタでの滞在も残りあと2日となってしまった。本日の午前中はこれまでに4回にわたって行われてきた分科会の結果報告を全メンバーの前で行った。インフラ、教育、文化、社会科学の4部門から、日本とインドから一人ずつ英語でこの1週間の分科会の成果を発表した。発表を聞きながら、改めて充実した時間であったな、と感慨深く思った。

結果発表のあとは、そのまま閉会式に移った。日印各メンバーがコルカタ本会議の感想をスピーチした後、日本側メンバーはニガム和子先生から一人一人、修了書と記念品を頂き、コルカタメンバーは長浜浩子先生から修了書を頂いた。夜はインドメンバーが明日コルカタを旅立つ友達に「さよならパーティー」を開いてくれた。日本側の女子メンバーは昨日購入したサリーを着つけて頂き、パーティーに参加した。パーティーでは踊ったり、写真を撮ったり各メンバーが思い思いに最後の時を楽しんでいた。パーティーも終わりの時間になった頃、コルカタメンバーから別の部屋に行くように促された。行ってみると、なんとコルカタメンバーからのサプライズのビデオ上映であった。そのビデオには私達がコルカタに到着する前から準備に取り掛かるコルカタメンバーの写りが納められており、ビデオを見ながらこの1週間何から何まで本当にお世話になったコルカタメンバーに心の底から感謝の気持ちで一杯になった。私自身は初めてのインド滞在であったが、このような素晴らしいメンバーと大好きなインドで一緒に活動出来たことを一生忘れないと思う。



8月19日(金) 葛原南美

<予定>

①コルカタ出発⇒チェンナイ到着

9時半にパッキングを済ませロビーに集合。ホームステイの時同様、1部屋にパッキングした荷物を集めてから出発。15分くらい歩いてコルカタメンバーの執行委員長 Madu の母校でもある学校を訪問、見学。音楽、数学、英語、ダンス等の授業風景を見学させて頂いた。この学校は幼稚園、小学校、中学校、高校まで一貫の公立の女子学校で学費は比較的高いらしい。授業風景を見学した後、秘書や校長先生とお会いして少しお話した。

12時過ぎに学校が終わる頃に、学校を出て先に帰国する酒井だけタクシーで移動。それ以外のメンバーは先日も行ったマーケットを通りラッシーを飲みながら宿泊先に戻り昼食をとった後15時半に宿を出発し1時間程かけて空港へ移動。空港の外でお見送りに来てくれたメンバーと最後のお別れをした。21時半にチェンナイに到着し少し日本円を両替した後、ABKの人と落ち合い1時間弱かけて宿泊先へ移動。チェンナイの日程表ももらってその日は就寝。





CHENNAI (チェンナイ)



8月20日(土) 水谷亮太

<予定>

- ①市内観光
- ②開会式

現地時間 9 時 30 分から現地の学生と共にチェンナイ市内を観光した。ヒンドゥー教の寺院とキリスト教の教会を回った。どちらの場所にも多くの信者が足を運んでいて、生活と宗教が日本と比較して、非常に密接であるということを実感した。

現地時間 12 時から、市内で最も新しく出来たというショッピングモールにショッピングをするために向かった。モール自体は非常に広く、綺麗でチェンナイという都市はとても発展しているという印象を受けた。

現地時間 17 時 30 分からは、ABK-AOTS 同窓会で歓迎会を開いて頂き、多くのインドの方が足を運んで下さった。また、日本語を学んでいる方が多く、日本とインドの繋がりを感ずると共に、日本に興味を抱いてくれるということに対する喜びも感じた。



8月21日(日) 川瀬 承

<予定>

- ①日本語学校見学
- ②ホームステイ

チェンナイ滞在 3 日目、ABK-AOTS DOSOKAI の日本語授業を見学した。
2 クラスにお邪魔したが、初級中級レベルであるようだ。様々な理由はあれ日本語を学びたいという想いの元、日本語学校に通う学生の多さには驚いた。学生との交流の場では、多くの学生から日本に関しての情報(食文化に関していえばかつお節とはなにか等)を深く聞かれ、興味を持たれていることに喜びを感じた。なかでも、ある中高生程の学生に対しひらがなの書き方を我々日本人メンバーで教えたことが印象に残っている。
昼食後、個々のホームステイ先へ移動した。



8 月 22 日(月) 新田 杏奈

<予定>

- ①ホームステイ
- ②エリオットビーチ観光

昨夜から、日本語学校で先生をされているギータ先生のお宅でお世話になった。チェンナイのホームステイは 1 泊 2 日と短めであったが、とても楽しい 2 日間だった。朝起きるとギータ先生がチェンナイの伝統的な朝ごはんを用意してくれていた。大きめの平たい銀皿に、スパイスたっぷりでおかゆのように米を煮たボンガルやドーナツのような形でさっくりと揚げられたワダをのせて、付け合わせのチャトニとよばれるカレーソースを混ぜながら手で食べるのがチェンナイ流の朝ご飯の食し方だ。朝でもボリュームはたっぷりであつという間に満腹になった。食後にコーヒーを出してもらったが、チェンナイはマドラスコーヒーなどコーヒーも有名であり、とても美味しかった。お腹も満たされた後、しばらく休憩をとり、荷物をまとめてからギータ先生とホームシスターの二ヴィと 3 人で市内の観光に出かけた。私は南インドの寺院に興味があったので、いくつか有名な寺院に連

れて行ってもらった。寺院に続く道には花輪や小物を売る露店が並んでいて門前町ならではの活気に満ちていた。家族へのお土産もこの露店で購入すること出来た。チェンナイの寺院は塔門の装飾が一際美しい。よく見ると一つ一つがヒンドゥー教の神々の形をしており細部にまで色が付けられていた。ちなみに、寺院の中に入る時は必ず靴を脱がなければならない。寺院の床は石造りなので陰になっていないところは裸足で歩くとかなり熱い。現地の人にも慣れているのかと思ったが、皆影のところまで小走りで走っている様子を見ると現地の人でも熱いようであった。寺院の中に入ると人であふれていた。皆捧げものの果物やジャスミンの花を手を祈りを捧げている。その場の雰囲気は何とも表現し難いが、唯々神聖な空間であることを感じた。

お昼をカフェで食べた後、ABK-AOTS 同窓会の事務所に戻り、日本人メンバーと合流した。全員がそろった後、バンで1時間半程かけてエリオットビーチに向かった。インド洋を望むエリオットビーチに到着した頃にはちょうど日没の頃合いであった。

地平線に沈みゆく太陽は日本で見るよりもなぜか大きく感じた。波打ち際で海水に濡れながら、眺めた空の美しさは今でも忘れられない。



8月23日(火) 中村恒輝

<予定>

①日本文化祭

今日はチェンナイ工科大学で行われた日本文化祭にゲストとして参加した。とてもきれいな大学で、構内ではガラス張りの教室の中でプログラミングの実習をしていたりと洗練された印象を受けた。イベント自体はコミュニケーターから予め聞いていたよりもはるかに規模の大きなイベントで、少なくとも300人ほどは観客がいたと思う。出し物としてソ

ーラン節や合唱を披露した。JISC メンバーが壇上に立ち、チェンナイの大学生から日本についての公開質問を受けるという場面があったが、突然のことで翻訳の方との意思疎通が難しく誤解を生む場面もあったが全体的にはインドの学生が日本のどの部分に関心を持っているのか知ることができ参加してよかったと思えた。参加していた方々は小学生ほどの子供たちからおそらく教職員まで幅広く、たった一つの大学にあれほど日本に関心のある人がいるというのは驚きだった。



8月24日(水) 右田淳一

<予定>

①在チェンナイ日本国総領事館

総領事 馬場誠治様表敬訪問 (於: 総領事公邸)

②JETRO 訪問/分科会 (1)

スーツでおでかけ。今日はタフな一日になりそう。

まずはチェンナイ総領事館訪問。総領事の馬場様は知性を感じさせる落ち着いた雰囲気の方で、こういう大人になりたいと思った。ハードウェアと金融業にインドの発展の余地があること、人口が多いだけにバンキングに市場拡大のポテンシャルがあることなどの話を聞いた。久しぶりに味わった海苔巻きと醤油がうれしかった。

昼食はバーガーキングにした。ビーフパティが使えないためチキンやマトンになっていて、日本のバーガーキングの味がしなかった。

続いて JETRO に訪問した。識字率が 10%違えば社会が大きく違うという話は興味深く、識字能力を持たない人へ将来的に教育できることを考えればやはりこの国のポテンシャルはすさまじいと思った。

その後 IIT で分科会の一日目。IIT の学生に対して名前負けしないようにと頑張った。「be more critical」と言われたり、経済学的観点を求められたりして IIT の洗礼を受けたけれど、議論に詰まったら論理の展開を考える姿勢や短い時間でも結論を出そうと努力する姿に鼓舞された。一時間半英語で議論しっぱなしで疲弊した。



8月25日(木) 水谷亮太

<予定>

①ヨガ体験

②分科会 (2)

午前中は、ABK-AOTS 同窓会においてヨガ教室を行った。私自身、ヨガは初体験であった。ヨガを体験することによって、どこか落ち着いた気持ちになった。また、体を動かすこと以上に、気を整えるということが目的であるという新しい発見もあり、興味深い体験であった。

午後は、インド工科大学 (以下: I I T) の学生と分科会を行った。就職活動をテーマに議論し、有意義な時間を過ごすことが出来た。I I Tの学生は志が高く、自分自身の会社を作るという意見が多く出た。また、自分の専門分野を仕事にしたいという学生もいて、勉強熱心であるという印象も受けた。こういった同世代の人達と議論することができて、私自身にとって、刺激になる経験であった。



8月26日(金) 新田杏奈

<予定>

①カラクシェトラ観光

②YAMAHA 工場見学

午前中はカラクシェトラという、チェンナイにある伝統芸の学校に訪れた。カラクシェトラとは「芸術の神聖なる土地」という意味をもつらしい。以前に天皇皇后両陛下もこの場所を訪問されたと聞いた。校内は木が生い茂り、自然そのままという感じであった。私達が訪れた日にちちょうど、運動会が行われていたようで、インド舞踊を見学することは出来なかったが、かわりに構内に併設された、伝統的なサリーの工房を見学することが出来た。工房で作られていたサリーにはブロックプリント式で布に模様がつけられていて、職人の方が一ミリのずれもなく一定のリズムでぼんぼんと布にブロックを当てていた。他にも、染色した布を干している女性達の姿や、別の工房では布に直接絵柄を描いている職人さんの姿も見ることが出来た。近くで覗いていると、絵を描いている職人のおじいちゃんが別の布を持ってきてくれて実際に鉛筆で下書きを描くところを見せてくれた。手本をみることもなく、生き生きとした神々の姿が布に描き出されていく。まさにインドの職人技を見ることが出来た。

カラクシェトラを出ると再びバンに乗り込んだ。次の目的地は、日本の YAMAHA 発動機の工場だ。YAMAHA の工場はまさに荒野という感じのひたすら野原しかない場所にでん、と構えていた。工場長の川島生司さんと横山研一郎様に工場の中を説明していただいた。数年前に出来たばかりの工場とは言え、清掃が行き届いた工場はどこもぴかぴかだった。現場で働いている方はほとんど全てが現地の方で、女性もたくさん働いていた。

インドで物を作る際の心構えや、現地の人との接し方、川島工場長の説明を聞きながら、その熱い思いに強く心を打たれた。モノ造りに対する日本の情熱をインドの地で改めて触れることが出来、とてもいい経験になった。



8月27日(土) 土屋直之

<予定>

①ダクシンチトラ/マハーバリプラム観光

②閉会式

チェンナイでの活動は事実上、今日が最後。インドの強い陽ざしに焼かれた道を、バスは今日も変わらず行く。しかし、今日は妙に寂しさが風のように心を撫でた。

今日、まず行ったのが DakshinaChitra。現在なお、インドの伝統的な家が残る施設である。インドの小学生もたくさんいた。どうやらインドの学生が遠足などで訪れるような、そんな施設のようだ。

その後、Mahabalipuram へ。一際目立つのが、バターボール。巨大な丸い岩が、一枚岩の斜面の上に止まっている。なんとも不思議な光景である。勿論、それに限らず、石でできた建造物群が多々ある。まさに rock だな、と僕は呟いた。

今日という日は、さよならパーティーで終わる。ABKの方々には本当にお世話になった。
心の中で啄木鳥のように頭を下げた。





DEIHI (デリー)



8月28日(日) 水谷亮太

<予定>

①チェンナイ出発⇒デリー到着 (World Buddhist Center)

早朝6時30分に移動し、デリーへの移動のため空港に向かった。チェンナイで私たちメンバーをお世話して下さった Aruloi さんも見送りに来て下さった。午後には、デリーに到着し、宿泊先であるワールドブuddhistセンターに向かった。デリーの街並みは、チェンナイに比べて交通量が多かった。また、サリーを着ている人もあまりおらず、西洋化が進んでいると感じた。夜ご飯は、中村お上人との食事を楽しんだ。中村お上人は、インド全体が抱える問題から生活レベルでよく起こる話などして下り、とても親しみやすく、ユーモア溢れる方だと感じた。



8月29日(月) 右田淳一

<予定>

①IJES 日本語学校訪問

②朝日新聞社ニューデリー支局訪問

デリーメトロに乗車。日本の JICA が出資して建設しただけあって、丁寧な案内放送や床に記された方向印のおかげで混乱することなく目的地まで到達できた。ただし、常にスリの危険と隣り合わせで油断のできない車内はきつかった。

日本語学校へ訪問。道中見かけた牛や生ゴミはインドの発展途上国としての実態を見

た気分だった。日本語の「スピーキング」「リスニング」「リーディング」「ライティング」のどれが一番難しいかと聞くと、「リーディング」との意見が多く意外だった。

インドで普及している uber というタクシーをオンライン上で手配し、朝日新聞に向かった。支局長の貫洞様は堂々たる佇まいで、よどみなく興味深い話を聞かせてくれた。インドで日々発展する IT 産業はヒन्दゥー教の教えの枠組みから外れたもので、たとえ貧しい学生であっても大躍進するための希望になっているらしい。その関連で、「スーパー30」という組織について水曜日に訪問する東大デリー事務所の吉野先生に詳しく聞くことを勧めていただいた。



8月30日(火) 安達亮太

<予定>

①在インド日本国大使館

特命全権大使 平松賢司様表敬訪問 (於：大使公邸)

②ICCR 訪問

③INSDOC チャウラ先生研究室訪問

午前は予定が入っていなかったため、各自自由に過ごした。

自分は10時頃に起床した後、マクドナルドで昼食をとった。Mcspicypaneer というインドオリジナルのメニューを頼んだが、とても美味であった。I'm lovin' it.

午後はバンを貸し切り、まずは在インド日本国大使館を訪問。平松大使の「まだまだ日本を認知、理解してもらうための理解が足りない。」という言葉が印象的であった。その

後も ICCR への訪問、チャウラ先生の勉強会と盛りだくさんな一日であった。また、今日はここまで同行してくださっていた長浜先生が一足先に帰国された。



8月31日(水) 葛原南美

<予定>

- ①マルチスズキ工場見学
- ②東大デリー事務所訪問

前もって予約していた10人乗りのバンで出発。道路状況の混雑を予想して6時半に宿泊先を出発。朝から雨は降って道路は所々渋滞してはいたものの、約束の時間である8時半の1時間前にはMARUTI SUZUKIのマネサール工場に到着。途中、デリー近郊のもうひとつの工場であるグルガオン工場周辺の道路を通ったところ、インドとは思えないような高いビルや高級ホテルが窓から見えた。予定より30分早い8時から企業説明を始めてくださった。自分達がチェンナイでYAMAHAの工場を見学したことを前提として比較しながら、パワーポイントと紙資料を使って紹介してくださった。1時間程紹介して頂いた後、マイクとイヤホンを通して説明を頂きながらの工場見学。質疑応答してもらった後、記念撮影をして11時には出発。一度宿泊先に戻り17時からの東大デリー事務所に備え待機。東大デリー事務所訪問前に、すぐ隣にある日本食販売店「やまとや」を見学・買い物。17時から19時まで東大デリー事務所の吉野宏先生とお会いしインドについて更に学べた。その後宿泊先に戻り夕食、就寝。



9月1日(木) 川瀬承

<予定>

①三井物産訪問

②国際交流基金訪問

雨がぱらつく足元の悪い中、メトロを使い目的地へ向かった。この日はメトロを使う初めての機会であり、無事到着して何よりであった。

午前の日程はインド三井物産への訪問。大橋さんをはじめ業務部の方から話を伺った。インド経済において政治はもちろんのこと、農村部における気候の変化により、経済活動全体に大きな影響を与えることに興味を持った。

午後はニューデリーにある Moolchand Metro Station から徒歩1分にビルを構える、国際交流基金ニューデリー日本文化センターへ訪問をした。今回の訪問に関し連絡をとってくださった野口さん案内の元、日本語学習専用の教室や50人以上は収容可能な舞台施設、日本語の本が収容された図書室などを見学させていただいた。地下室には展覧会に適した広さの部屋があり、ヒロシマでの遺品を題材にした本の写真展が行われていた。この展覧会、英語ヒンディー語の二言語で表記していたことに興味を持った。また、日本を広報する方法の一環か立命館大学のインドオフィスに部屋を貸しているようであった。宮本センター所長にお会いし、とても気さくな方だと感じた。



◀デリーメトロ駅構内の様子

9月2日(金) 葛原南美

<予定>

- ①JICA 訪問
- ②買い物 (メインバザール) /中村お上人と夕食



メトロを乗り継いで、11時から JICA のデリー事務所に訪問させて頂いた。1時間程 JICA のインドにおける取り組みや問題点についてお話しを頂いた後、30分程質疑応答をさせて頂いた。去年 19 期が訪問したことも覚えてくださり嬉しく感じた。最後に記念撮影をした後、JICA デリー事務所のすぐ近くにあるベジレストランで昼食をとった。

その後、デリーで一番インドらしいお土産を買えると思われるメインバザールまでリクシャで移動し、1時間程お土産を購入。ショッピングモールとは違って、バザールなので自分で値段を交渉したり物乞いの子についてこられたり、インドのカオスな面を感じられたと思う。その後リクシャで最寄りのメトロの駅まで移動し、メトロで帰宅。夜は中村お

上人にインドで一番美味しいと言われる Pindi というレストランに連れてっていただきご馳走になった。アジアやアフリカの国の大使がよく食べにくるお店だそうで、とても美味しかった。



9月3日(土) 小泉晴香

<予定>

①アグラ観光

7時半出発。日本語学校の学生とアグラまで移動。途中サービスエリアで長居してしまったため、少々遅れてタージマハルに到着。まず売り場でチケットを購入。1人1000ルピー。購入後無料（インド人は1人60ルピー）のバスに乗って入り口近くまで移動。セキュリティチェックを通過したのち目的のタージマハルとご対面。休日ということもあり、観光客に限らず大勢の人が訪れていた。純白のそのの大きさに圧倒されつつも歩を進め、タージマハルの中を回る。余韻に浸りつつタージマハルを後にし、昼食後アグラ城へ。入場料750ルピー（タージマハルの入場券を見せると50ルピー割引）。真っ赤な壁に覆われた城は日本のそれとは全く異なる雰囲気を楽しむことができた。先ほど間近で見たタージマハルを臨むことができるのも良い。急ぎ足で回ったのちバンへ戻り、21時半ごろホテルへ到着し学生さんたちとお別れとともに解散した。

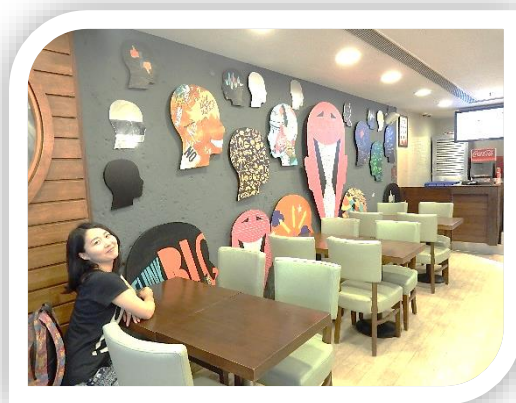


9月4日(日) 新田杏奈

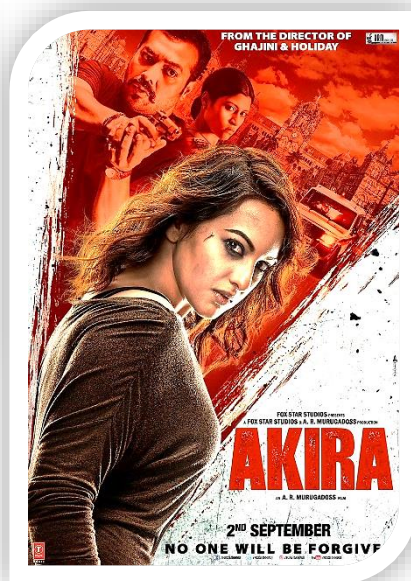
<予定>

①デリー出発⇒成田到着

長く思えたインドでの本会議開催も本日が最後となった。デリーを立つ飛行機の時刻は夜の21時15分。出発までまだ時間があるということで、午前中はデリーの中でもサイバーシティと呼ばれ、大手企業が集中するグルガオンに出かけることになった。メンバーはグルガオンの町を観光するグループと、グルガオンのモールの中でハリウッドムービーを見るグループに分かれて行動した。私は本場のインド映画に興味があったので、グルガオンのモールで「AKIRA」というハリウッドムービーを見た。英語の吹き替え版がなかった為ヒンディー語での視聴になったが、ストーリーもわかりやすく、音楽など視覚以外の要素から登場人物の気持ちを理解出来るような映画であったので、それほど苦もなく楽しむことが出来た。映画を見終わると、モール内でもう一グループと合流し、いよいよ帰国の途に就くことになった。全員荷物の重量規定も何とかクリアし、夜の便でデリーを発つと日にちをまたいで朝の8時頃に全員そろって無事日本に到着した。



▲グルガオンのショッピングモール
の中にあるドーナツ屋さん



4. 在外公館・企業訪問報告

在チェンナイ日本国総領事館

総領事 馬場 誠治様 表敬訪問（於：総領事公邸）

水谷 亮太

✿訪問日時:2016年8月24日

✿訪問の目的

総領事館という日本の公的機関の立場から見たチェンナイの位置づけを知る。また、チェンナイに継続的に関わる立場の方から直接お話を伺うことで、1週間の短期の学生交流からでは得難い俯瞰的な理解を得る。

✿当日のタイムスケジュール

10時00分～ 自己紹介、在チェンナイ総領事 馬場誠治様と面談

10時30分～ 総領事公邸で日本の味も並んだおもてなしを頂く

11時15分 面談終了

✿訪問先概要

在チェンナイ日本国総領事館は、都市における日本国民の保護、査証の発行、証明書の発行、友好親善、国際会議の準備等を主な業務としている。また、2016年8月28日には、「チェンナイ日本人会 2016年夏祭り」の開催、私たちがチェンナイで大変お世話になった ABK-AOTS 同窓会タミルナドゥ支部との共催で毎年「ミニ・マラソン大会」が開催など行っている。

✿考察

在チェンナイ総領事 馬場誠治様は、チェンナイという都市の特性や将来性・インド全体としての歴史について話を下さった。チェンナイは、インド洋に面している都市で物流面において北部インドより優れており、海外企業の誘致が現在増加傾向にあるという

ことであった。日本企業の進出も盛んであり、主に自動車・二輪自動車などの製造業の企業が多いとのことであった。隣には、カルナータカ州もあり、ITも非常に発展している。

また、一番印象的でもあり、馬場様自身が繰り返されていた言葉が「多様性」という言葉であった。インドという国は、地域によって人種も、話す言語も異なり、キリスト教・イスラム教・ヒンドゥー教など多くの宗教があり、非常に多様性に富んでいる。しかし一方で、この多様性を保ちながらも、「インド人」という一つのアイデンティティーが共有されていることは驚くべき点である。馬場様も日々の業務を通してこの多様性を感じる場面が多く、「多様性」という言葉はインドを語る上では、非常に重要であるという事がうかがえた。

✿感想・意見

在チェンナイ日本国総領事 馬場誠治様のお話を伺って、チェンナイという都市の将来性やインドの「多様性」ということについて知ることが出来た。チェンナイという都市は、日本にいた時は、名前のみしか知らず、どのような都市であるのかということまで詳細な知識は有していなかった。実際は、多くの日本企業が進出していて、町中には日本のスクーター・自動車が多く走っていて、日本との繋がりを感じた。「多様性」に関しては、世界においても類を見ない多様性がインドにあると思う。過去には、ユーゴスラビア連邦という国が多様性を保持した国として挙げられる。これだけの多様性を抱えながらも、大きな紛争もなく、一つの国として成り立っているインドは、改めて興味深い国であると感じた。私自身もまた、この「多様性」を受け入れられる「寛容さ」についてこれからも考えていきたい。



日本貿易振興機構（JETRO） 訪問

新田 杏奈

✿訪問日時：2016年8月24日

✿訪問の目的

近年、日系企業の進出先が、成長著しいアジアや新興国などに移行する流れはさらに加速しつつあり、南インドは特に著しい。日本企業は今、刻一刻と変化する現地ビジネスへの正確な対応力が求められている。日本企業の対インドビジネス戦略に活路はあるのだろうか。開発途上国研究を現地で行いながら、貿易や・投資の促進を支援しているJETROの事務所で話を伺い、インドにおける日本の投資事業の現状について学習・理解したい。

✿当日のタイムスケジュール

- 13:00 JETROへ移動
- 13:15 団体・自己紹介
- 14:00 資料説明：タミル・ナドゥ州の投資環境について
- 16:00 質疑・応答
- 16:30 訪問終了

✿訪問先概要

ジェトロは2003年10月、日本貿易振興機構法に基づき、前身の日本貿易振興会を引き継いで設立。70カ所を超える海外事務所ならびに本部（東京）、大阪本部、アジア経済研究所および国内事務所をあわせ約40の国内拠点から成る国内外ネットワークを活用し、対日投資の促進、農林水産物・食品の輸出や中堅・中小企業等の海外展開支援に機動的かつ効率的に取り組むとともに、調査や研究を通じ我が国企業活動や通商政策に貢献している。インドでは、ニューデリー、ムンバイ、アーメダバード、チェンナイ、ベンガロールの5拠点で日本企業を支援している。

✿考察

JETROの資料説明によると近年、投資先は南インドに移行しつつあり、タミル・ナドゥ州だけでも192社577社の拠点がある。中でも、日産、ヤマハなど自動車製造業が多い

のが特徴的に思える。一説によると、2030年頃に最も購買力を持つ国はインドであると言われており、その市場の獲得を狙って続々と企業の進出が進む一方で、ビジネス環境の違いという壁は高く、未だ中小企業の4割が赤字であり、黒字化するまでには時間がかかるようであった。一方で、チェンナイ近郊には港湾があり、輸出入には最適な場所である。インドの電力事情も、北の余剰電力を、南に送電できるようになる等、インフラも少しずつ整いつつあるようである。

✿感想・意見

説明を受けながら、想像以上に多くの日本企業がインドに進出していること驚いた。

特に、チェンナイの町は道路も舗装され、北インドよりも街自体の都市化がより進んでいるような印象を受けた。特に、インドの各州によって異なる数%の識字率の差がその町に生活する人々の仕事ぶり、特に接客対応に如実にでると現れるというお話が印象的だった。識字率だけでなく、言語も、文化も州を越えてしまえばインドでは全く異なってくる。北インドと南インドでは異世界とっていいようにまるで異なる世界が広がっていた。日本人はそのような差に衝撃を受けるが、今後インドに進出していく日本企業は杓子定規で測れないインドの多様な文化や価値という壁をどう乗り越えるか、この難問に答えていかなければならないと感じた。



India YAMAHA Motors

Pvt. Ltd Chennai factory 訪問

葛原 南美

✿訪問日時:2016年8月26日

✿訪問の目的

世界のオートバイ市場の3割を占めるインド、特に南インドで、日本企業であるYAMAHAがどのように現地に溶け込みモーターバイクを生産・販売しているのか、いかにインドの人々の生活を便利なものになっているのか、そして日本企業の海外での工場立ち上げと運営のプロセスを学ぶ。

✿当日のタイムスケジュール

13:00-14:00 企業説明と質疑応答

14:00-15:30 工場内見学

✿概要

India YAMAHA Motorsの工場。2011年に工場を建設するための土地を探し始め、2015年の3月に稼働し始めた。チェンナイの都市部からは1時間以上離れた近郊に位置していて、モーターバイクを製造している。日本人社員は16名、2600人以上のインド人が働いている。

✿考察

稼働を始めて1年半弱しか経っていないことも一因かもしれないが、工場内やガーデニングがとてもキレイに清掃・整備されている。施設にも所々、日本的な工夫が見られた。

例えば工場の敷地内に屋根付きの歩道を作ることで車道と歩道の概念を定着させていた。また工場内で働く人も敷地内の環境整備をする人もみんな紺のユニホームとキャップを身に付けることで統一感や団結感を持って仕事をできるよう工夫していた。また日本企業の海外工場によく聞く「カイゼン」が実践されていた。例えば食堂で一日に廃棄する食料の量を記録して減らすように促したり、一日の製造台数の目標を定め前日と比較して今

日の製造が進んでいるか遅れているかを一目で分かるように提示していた。インドにありながらも日本が作った工場であることを意識させられる部分が多々あった。そして日本式の工場運営が、工場を効率的・持続的に稼働させるだけでなく、働く人の意識づけの面でも有効であると考えた。

✿感想・意見

工場長である川島生司様の工場と労働者への愛や、リーダーとしての能力に終始感動させられていた。工場紹介の中でも、地域住民の生活に配慮して工場を建設したこと、地域貢献を強く意識していること、物を作るだけではなく人も育てることを丁寧に分かりやすく紹介していたため、CSR が上手く伝わってきて、バイクを買うなら YAMAHA だと思った。また南インドでバイクに乗る女性が多いこと、作業としてバイクの組み立てが女性にも可能であることから女性の労働者が多いことにも好感を持てた。ちゃんと女性はバス停までではなく家まで送り迎えする点も女性にとって安全面から働きやすいため、女性の社会進出にも貢献している気遣いだと感じた。総じて人にも地域にも環境にも優しいモノづくりが更なるインドの持続的な発展を支えているのだと学ばされた。



朝日新聞社ニューデリー支局 訪問

新田 杏奈

✿訪問日時：2016年8月29日

✿訪問の目的

私達は日本にいても、テレビやインターネット、新聞などからインドで起きる様々なニュースを知ることが出来る。そして、そのようなニュースの多くは現地のメディア支局によって日々発信されているが、実際はどのように取材され、記事にしているのだろうか。私たちは正直知らない部分が多い。実際にインドで取材をされている朝日新聞デリー支局長貫洞欣寛様をお訪ねし、直接お話をお伺いすることで、インドにおける日本メディアの最前線を理解したい。

✿当日のタイムスケジュール

- 15：00 朝新聞社 到着
- 15：15 団体説明・自己紹介
- 16：25 質疑・応答
- 16：30 記念撮影：訪問終了

✿訪問先概要

株式会社朝日新聞社（あさひしんぶんしゃ、英語：The Asahi Shimbun Company）は、全国紙『朝日新聞』を発行する日本の新聞社である。国内全都道府県と海外5総局33支局、計317の総局・支局があり、印刷は全国27カ所に拠点がある。インドにおける唯一の支局がニューデリーにある。

✿考察

10億を優に超える巨大な国家がその多様性をどこまでコントロールして行くことが可能なのか。経済的にも成長し、今後世界で頭角を現していくであろうインドという国が、今後どのような動きをしていくのか。10年いや20年、30年先を見据えて、インドという国の未来を冷静に見つめていくと、インドという国が秘めている大きな可能性と

危うさが炙り出されてくるかに思えた。カーストや原子力の問題といったインド社会のタブーに切り込んでいくことはメディアにしかできないスタイルであろう。

✿感想

一部の目覚ましい発展の陰と、取り残された人々。実際に、充実した教育が受けられているのは全体の4%に満たないという貫洞様のお話には、衝撃を受けた。数字にしてみると、インドが内包するこうした格差の問題が未だ厳然として存在することを改めて突き付けられたような気がした。現代のインドに対する論調は、その華々しい経済発展に焦点を当てたものが多く、眩いばかりであるが、20年、30年まで先に未来を見つめてインドの姿を捉えてみると、また違ったインドの姿が見えてくる。いずれインドが世界を牽引していく日が本当に来た時、日本は、世界はこの国とどう向き合うのか。実際に現地取材され、日々インドが抱える問題とペン一本で戦われている方のお話を聞いて、インドを取り巻く世界のこれからの動きについて改めて真剣に考えさせられた。



デリー日本語学校

IJES Japanese Language School 訪問

小泉 晴香

✿訪問日時：2016年8月29日

✿訪問の目的

どのような環境において日本語学習が行われているのか見学する。日常的な日本語母語話者との交流が困難な日本語学習者と交流することで、インド人学生たちへの貴重な機会を提供するとともに私たち自身もインドにおける人脈を広げることを目的としている。

✿当日のタイムスケジュール

- 10:00 日本語学校到着
- 10:10 自己紹介
- 10:25 学生によるプレゼンテーション
- 11:10 交流
- 12:00 訪問終了

✿訪問先概要

JISC の創設者長浜先生の古くからの友人のお一人、アショク・チャウラ先生が運営に関わっている日本語学校。

✿考察

チェンナイで訪れた ABK-AOTS DOSOKAI の日本語教室とは異なる年齢層の学習者と交流できたため良い機会であった。また学生によるプレゼンテーションではインドの文化が日本語によって紹介され、インドに関する知識を深めることもできた。しかし学生との交流を特に形を定めず行っただけのため、会話が弾む人とそうでない人や話をできない人ができてしまった。より多くの人とまんべんなく交流ができるようによりある程度システム化させることが必要だと感じた。また、今回の交流会は JISC から発信することは無く受身の態勢

であったためこちら側からも日本の文化を紹介するプレゼンテーションなどを行ってもさらに交流が深まるのではないだろうか。

✿感想・意見

日本語学習者との交流もさることながらインドの日本語学校に常勤している小森あゆみ先生に出会えたことが私にとっては大きな収穫であった。日本語教師にも日本語のネイティブは少ないという。そんな環境でも熱心に日本語を学習している彼らにとって私たちとの交流は大変貴重なものであることを深く感じた。そんな彼らの熱意に応えるためにも交流会で私たちから積極的に企画を発信していきたい。



タージマハルにて：日本語学校の学生と記念撮影

在インド日本国大使館

特命全権大使 平松 賢司様 表敬訪問（於：大使公邸）

水谷 亮太

✿訪問日時:2016年8月30日

✿訪問の目的

外交の第一線で活躍される方からお話を伺うことによって、国家レベルでの日本とインドの関係や今後の展望について知見を深めること。

✿当日のタイムスケジュール

14時15分～ 自己紹介、特命全権大使 平松賢司様と
大使公邸にて面談
15時10分 面談終了

✿訪問先概要

在インド日本国大使館は、インドに対して日本を代表して政府との外交や、インドの国の政治、経済などの情報収集、分析を行っている。また、ビザの発給やパスポートの発行・更新、滞在先での自国民の保護といった援助などの領事サービス、広報・文化交流活動などの業務を行う。

✿考察

特命全権大使 平松賢司様がおしゃっていたインドにおける日本人のイメージを変えたという言葉が印象的に残っている。日印関係に関して、ビジネスの面であると、近年では製造業を中心とした日系企業の参入も増加傾向にあり、日印関係もアメリカ・日本・インドと三か国を中心に繋がりを強めようという中で過去最高に良好な関係を築くことが出来ているということであった。一方で、日本からインドへの旅行者は少なく、これは、日本人のインドに対する印象がそれ程良くないということからきているとおっしゃっていた。また、インド人により日本を知ってもらうために、日系企業と協力して映画を作成しているという話も非常に興味深かった。「日印特別戦略的グローバル・パートナーシップ」を2015年に両国間で締結され、日本にとって外交上、アメリカと同等に重要な位置

づけがされている。インドは、今後人口も増加傾向にあり、IT が進んでいるということもあり、未来が非常に明るい国である。しかし、貧富の格差は激しく、今後は、その貧富の格差をどのように埋めていくことができるかが重要であるとおっしゃっていた。

✿感想・意見

率直な意見として、旅行でインドを訪れることはあっても、在インド日本国大使館に訪問し、大使から直接お話を伺うことのできる機会は、非常に貴重であり、この度は大変光栄な機会を頂いたと思う。平松様の話をお伺いして、インドが日本にとって非常に重要な位置づけにあるということが分かった。生活レベルであると、あまりインドの情報は日本には入って来ず、インドと言うと治安や衛生面に不安があるといったマイナスのイメージが先行する日本人が多いのではないかと思う。たしかに、インドは日本に比べて、街並みはあまり綺麗ではないが、様々な文化があり、非常に奥が深く興味深い国であると思う。

ソフトな面から言うと、インド映画は、ボリウッドとして日本でも有名である。日本のアニメはインドで非常に人気があり、今後も一つの日本の知るきっかけになるだろうと思った。これらのものが日本とインド間の人の移動をより活発にする起爆剤のようなものになるのではないかと私は期待している。



Indian Council for Cultural Relation (ICCR) 訪問

中村 恒輝

✿訪問日時：2016年8月30日

✿訪問の目的

インドの文化を発信や海外学生の受け入れを行っている ICCR を訪問し、現在 Director General, ICCR の C. ラジャセーカル氏等からお話を伺うことで文化発信を取り巻く環境とその変化を学ぶ。政府系組織としての具体的な影響の仕方を知る。

✿当日のタイムスケジュール

16:30～17:00 自己紹介、団体紹介

17:00～18:00 ラジャセーカル氏、大学教授の方々のお話しと質疑応答

✿訪問先概要

Indian Council for Cultural Relation (ICCR) とはインド文化の発信、交流を行っているインドの政府系機関。文化の交流に関する様々なイベントを運営しているほか、インドへ留学する学生への奨学金事業も行っているなど活躍の幅は広い。1950年設立。

✿考察

ICCR が一方的にインド文化を発信するだけでなく、海外の学生を受け入れることによっても関係を強化していることを理解した。議長のラジャセーカル氏、お話を頂いた大学教授の方々はみなインドを表現することに強い熱意を持っていることが質疑応答からも伝わってきた。

長く対外関係に携わった経験をもとに、日本の企業がなぜインドで困難に直面するのか、人気の韓国企業との競争の実態など単なる短期間の滞在では知られないような業界の裏側まで話していただき密度の濃い時間を頂いた。

✿感想・意見

当日お会いしただけの私達に対し、単なる建前的な話でなくインドにおける日本企業の歴史、国際競争の舞台裏などまで親切にお話しいただいた。訪問メンバーにとって長年の対外経験ある職員の方に質問する機会は貴重なものであったと思う。

お話を伺うというより議論のようで、時折日本語でも難しいようなテーマで意見交換が行われた（行動経済学が实体经济に与える影響とは、等）。複数の教授が学生側の意見をきちんと聞いてくださり、学生との分科会とはまた別の角度から考えが深まったと感じる。

ただ、日本側の英語力の未熟さにより貴重な意見交換の時間がフルに使えなかったことは否めない。国際交流の本質が言語だとは思わないが、わざわざインドまで来て異文化交流を進めようというのに挨拶すら十分にできない者がいるというのは情けないことではないだろうか。交流する相手に気を使わせないためにも、また支援を頂いた財団、訪問先の方々の期待に応えるためにも私達は自己研鑽を怠ってはならないと痛感した機会であった。



❖訪問日時：2016年8月30日

❖訪問の目的

事前に JISC 側から提示していた質問事項について、日本語が堪能であるうえ歴代インド首相の日本語通訳者を務めるほどの知識人であるチャウラ先生の見解を聞くことにより、私たちにとって貴重なインド人社会人の意見を知るとともにインドに関する知識をさらに深める。

❖当日のタイムスケジュール

18：00 研究室到着

18：30 チャウラ先生から経歴紹介

18：40 質問事項に対するチャウラ先生の見解の説明

19：30 学生からの質疑応答

20：00 訪問終了

❖訪問先概要

チャウラ先生は JISC 創設者の長浜浩子先生との古くからのご友人のお一人であり、本業である Indian National Scientific Documentation Center の研究者としてお仕事をされる傍ら、JISC の4期から8期までの本会議開催において、カウンターパートとして大変ご尽力頂いた。

❖考察

今回用意した時間の中では事前はこちら側が提示していた質問事項に関するやり取りに終始してしまい、チャウラ先生が用意して下さったお話を伺えなかったことが悔やまれたが、JISC はインド人学生との交流を主な目的としているため、大人の意見を知る機会を得られたことは私たちにとって大変貴重な経験であった。

✿感想・意見

私の興味分野に関する質疑応答であったため個人的には貴重な大人の意見を聞く充実した時間であった。チャウラ先生ほどの日本語話者ヘインドに関する質問をすることは活動の中でも他にないため、再来年度以降はより多くの時間を割くことをお勧めしたい。

学生とは異なった経験やバックグラウンドに基づく先生の意見には疑問を持つこともあったが、新たな視点が発見できたと思う。

学生とのディスカッションが主な団体ではあるが、同時に大人の意見を伺うことの重要性を改めて感じさせられた。



✿訪問日時：2016年8月31日

✿訪問の目的

日本でのシェア率は決して高くないスズキが、異国の地インドでマルチスズキとしてどのような歩みを進めてきたのか。日本企業のインドにおける成功事例を知り、工場見学を行うことで日本とインドの密接な関わりについて学ぶ。

✿当日のタイムスケジュール

7:15 マルチスズキ・マネサール工場到着

7:45 マルチスズキの沿革について説明

8:30 工場見学

9:20 全体を通した質疑応答

10:00 訪問終了

✿訪問先概要

インドの国営企業マルチ・ウドヨグ社と1982年に契約を締結し、10年後マルチがスズキの子会社となることで現在のマルチスズキとなる。主に乗用車をインド人向けに国内で生産・販売している。2011年から2013年度にかけて経済の落ち込みを受けて販売台数が減少するも、2014年度からまた上昇している。マネサール工場とグルガオン工場、2つの向上を所有しており、現在グジャラート州に新たな工場を建設中である。

✿考察

マルチスズキの沿革や、作業効率を上げるためにどのようなシステムを導入しているのかを丁寧に教えていただいた。工場見学の際には乗用車を用意していただき、工場の規模の大きさを感じさせられた。30年という長い歳月をかけて乗用車のシェア1位まで上り詰めただけあり、どこか余裕を感じさせられた。予定より大幅に早く到着してしまったにもかかわらず、時間を繰り上げて訪問を受け入れてくださったことが強く印象に残った。

✿感想・意見

インド人の好みや思考に合わせた生産・販売の仕方や、スズキ社長が自らごみを拾うことで従業員に正しい態度を示したというエピソードを聞き、マルチスズキのような異国の地で事業が成功した企業の秘訣を知ることができ良い経験となった。



東京大学インド事務所 訪問

土屋 直之

✿訪問日時：2016年8月31日

✿訪問の目的

インド人留学生の日本招致の最前線として実際にインドに拠点を構える東大の事務所にお伺いし、直接お話を聞くことで、日印関係の友好関係の現状や、これからの発展に向けた取り組みについて更に知識を深める。

✿当日のタイムスケジュール

17:00～19:00 吉野先生より、お話を伺う。

✿訪問地概要

東京大学のインド事務所。日本へのインド人留学生の受け入れ促進、インドへの日本人学生の受け入れ促進、インドにおける学界・産業界とのネットワーク強化を通じた日印の学術交流・産学連携の推進等を目的に設置された。

✿考察

インド5000年の歴史の根幹にあるものは、アーユルヴェーダ、ヨガ、占星術の3つであるというお話を聞き、これらが実際 science としてインドでは受け入れられているというのは驚きであった。特に、インドでは医学部も医者も西洋医学とアーユルヴェーダの2つがあること、占星術が最高裁判所で science（正確には beyond science であるが）として認められたという事実を聞き、インドが5000年にわたり積み重ねてきたものと西洋化の邂逅という現代のインドの体質が垣間見えた。

✿感想・意見

我々が持っているようなインドとは全く異なった「インド」像が得られた。漠然と経済発展と言ってしまうと、西洋化の進行のように感じられてしまうが、インドでは長い歴史の裏打ちがあるのだという事実は忘れてはならないことだと思う。

また、吉野先生は占星術によって結婚相手を決めたり、独立記念日を一日ずらしたり、という日本の常識からはかけ離れていることも起こり得る、すなわち、何を「善」とするかは国によって、そして人によって異なるのだということを仰っていたが、まさしくその通りである。多様な人間が存在するこの世界はグローバリゼーションの進展の中でより小さくなっており、その中で互いに尊重し合えるような世界にしなければならない。Mark TwainがTravel is fatal to prejudice, bigotry and narrow-mindednessと述べたように、これが実際に多様な人々を目の当たりにして自らの偏屈な視野が打破されるような良い機会であったように思う。



インド三井物産株式会社 訪問

右田 淳一

✿訪問日時：2016年9月1日

✿訪問の目的

日本を代表する商社である三井物産の職員の方々のお話を伺い、投資先としてのインドの特徴や現状、インドに投資が集まる背景などを学習・理解する。

✿当日のタイムスケジュール

- 11:00～11:40 業務部副部長の沖孝昭様からお話を伺う
インドの政治・経済・社会の動向について
- 11:40～11:50 インド三井物産株式会社の組織・事業について
- 11:50～12:30 質疑応答

✿訪問先概要

三井物産株式会社は日本の大手総合商社で、日本の紡績業の発展に寄与したことは歴史の教科書にも記されるほど有名。当時インドは綿花の一大産地であったため、インドへの進出は早く関係も深い。

✿考察

インドでは高機能・高価値よりも安価で使いやすい製品が好まれること、JICA が主導する鉄道敷設がさらに広域化する中で日本のエキナカビジネスが収益化のカギを握ることなどをお聞きし、インド市場の分析力にひたすら感銘を受けた。ただ、インドという国の多様さ・複雑さには大手総合商社といえども十年後の展望さえ完全には把握しきれない様子だった。

✿感想・意見

モディ政権が推進する Make in India の印象が強く鉱工業に意識が向かいがちの中、農業の影響力の大きさを解し農村の可能性を最大限に見出す姿勢を感じ、学生の短絡的な思考を反省させられた。インド国内どこでも農業ができるほどインドの大地は豊穡で恵ま

れていること、農村の機械化が利益誘導型の政治の争点になっていること、干ばつに影響される農村の購買力の増減が都市の購買力を大きく左右することなどの指摘を受けた。

モディ政権はほかにも、GSTの導入によって税金を一元化し、インド企業の支出の6%を物流費が占める現状を打破しようとしているが、EUのような多国間経済同盟が関税を撤廃するなかで、いまだに一国内で物流費が関税のようにかさんでいること自体に驚いた。



国際協力機構（JICA） 訪問

中村 恒輝

✿訪問日時：日時：2016年9月2日

✿訪問の目的

政府系機関という公的な立場からインドに関わり、ODA 援助という具体的な活動を行う団体について直接的に知ることで両国関係を発展させる一つの形を学ぶ。実際に国際協力を仕事としている職員の方からお話を伺うことで学生という現場から遠い立場では得られない事業の現状を理解する。

✿当日のタイムスケジュール

11:00 JICA インド事務所到着

11:10 インド事務所駐在員の吉田啓史様より JICA の事業概要の紹介

11:30 担当現在のインドにおける JICA 事業、今後の事業予定について説明

11:50 日本インド学生会議メンバーとの質疑応答

12:30 訪問終了

✿訪問先概要

国際協力機構（Japan International Cooperation Agency）は日本の独立行政法人であり、政府が決定した方針に従い ODA を有効活用する ODA 事業の一元的実施機関。開発途上国が抱える問題を解決するために世界各地に展開して活動している。インドではデリーメトロ事業が特に有名。

✿考察

やはり政府系の機関であるだけに公共性を重んじる傾向は感じた。ODA を使った国際援助ということでその規模の大きさも理由の一つなのだろうが、方針や事業の概要などについても一つ一つがオープンにされているように感じられた。受付近くに財務関係のデータが持ち帰り自由に置かれていたことや、メンバーの質問に対してまっすぐに答えてくださったことは印象に残った。

デリーメトロ事業についてはフェーズ途中の現在でも特に成功した ODA と評価されているが、今後開始を計画している高速鉄道事業についてはまだ確定していない点が多いように見受けられた。採算を重視しなくてよい開発援助ではあるが、導入したものがどの程度普及するのか、継続可能なのかは判断が難しい問題のようだ。

✿感想・意見

個人的には援助の内容がどうやって決定されているのかの一部のプロセスが分かりやすい経験だったと思う。ODA が何に重点を置いているのかも普段では分からないことだと思う。

ODA に依存した事業であるが、その事業自体でどれだけ自立して運営していけるのか、その事業が既存のもの（高速鉄道ならば航空機など）と競合するのではないかという点は自分にとっては大きな関心があった。



5. 分科会報告

インフラ

8/12 (金) PM分科会①

- (1)Aviation infrastructure
- (2)A comparative study on the architecture

8/15 (月) AM分科会②

- (3)渋滞の混雑と緩和

PM分科会③

- (4)Renewable energy

8/16 (火) AM文化会④

- (5)インフラと電力
- (6)Emergency/Disaster management

教育

8/12 (金) PM分科会①

- (1)Higher education
- (2)英語化による社会的影響

8/15 (月) AM分科会②

- (3)Collectivism versus individualism and the effect of culture on education

- (4)性教育

PM分科会③

- (5)Stigma towards mental illness

- (6)Free schooling and education system

8/16 (火) AM文化会④

- (7)ハンセン病問題

- (8)A history of boarding

school education

コルカタ
分科会

@Jadavpur University

文化

8/12 (金) PM分科会①

- (1)A comparative study of the gender identity in the Indian theatre and Kabuki

- (2)社会における女性の影響力

8/15 (月) AM分科会②

- (3)Psychology of fairy tales
- (4)Rituals of the Shinto and Hindu religion

PM分科会③

- (5)Urban Legends

- (6)死生観

8/16 (火) AM文化会④

- (7)就職活動

- (8)Indian raga and Japanese Gagaku

社会と科学

8/12 (金) PM分科会①

- (1)The science of early cinema
- (2)地域間格差

8/15 (月) AM分科会②

- (3)Plate tectonics and earthquake hazards

- (4)The great space debate

PM文化会③

- (5)領土問題

- (6)R&D and its effects

8/16(火) AM文化期④

- (7)Gaming/Evolution & influence in the Fields of science

【コルカタ】

場所：Jadavpur University

形式：グループごとのテーブルディスカッション

日程：8月12日（金）、15日（月）、16日（火）

（4グループ：インフラ、教育、文化、科学と社会）

インフラ

8/24（水） PM分科会①

- (1)渋滞と混雑の緩和
- (2)インフラと電力

8/25（木） PM分科会②

- (1)渋滞の混雑と緩和
- (2)インフラと電力

教育

8/24（水） PM分科会①

- (1)英語化による社会的影響
- (2)性教育

8/25（木） PM分科会②

- (1)英語化による影響
- (2)性教育

チェンナイ
分科会

@ IIT Madras

文化

8/24（水） PM分科会①

- (1)社会における女性の影響力
- (2)死生観
- (3)就職活動

8/25（木） PM分科会②

- (1)社会における女性の影響力
- (2)死生観
- (3)就職活動

社会と科学

8/24（水） PM分科会①

- (1)地域間格差
- (2)領土問題

8/25（木） PM分科会②

- (1)地域間格差
- (2)領土問題

【チェンナイ】

場所：IIT（Indian Institute of Technology）Madras

形式：日本側1人につきインド側複数人のディスカッション

日程：8月24日（水）、25日（木）

日本側プレゼンテーション インフラ部門 (INFRASTRUCTURE) I



《担当者》中村 恒輝

《テーマ》 : *Infrastructure and electricity*

(インフラと電力)

《目的》

2015 年の原子力協定合意が日印間の原子力技術移転を可能にしたことで、原発と電力問題は今大きな関心事となっている。インドでは電力問題が経済成長のボトルネックになっているためとりわけ注目度が高い。日本では電力量の絶対的な不足は震災後では見られず、むしろエネルギーミックスの問題やスマートグリッドなどによる省エネ政策が議論に上りやすいが、対してインドでは人口増加と経済発展による需要量の増大によりそもそも供給量が需要量に追いつかない状態が慢性化しているのだ。大きなポテンシャルを秘めたインドの発展に悪影響を及ぼす電力問題はモディ首相も特に力を入れている部分である。

今インドと日本の将来のエネルギーバランスを議論することは未来の意思決定に携わる私達に大きな影響を与えるものであり、経済を重視したエネルギーミックスを持つ国の学生達と意見を交えることは新たな視点をもたらすと思われる。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

議論①、 『日印における最適なエネルギーミックスとは何だろうか？ 』

日印両国のそれぞれのエネルギーへの依存度をインドの電力需給ギャップと共に見せ、その後増やすべきエネルギーは何かを両国について話し合った。

議論②、 『原子力エネルギーは優れた化石燃料の代替となれるか？ 』

2011 年の東日本大震災と福島第一原発について説明し、日本の原発がすべて停止したことを示した。そのうえで原子力発電自体の是非を話した。

議論③、 『原子力技術の輸出の是非』

2015 年の原子力協定が原子力面での協力を可能にした点を踏まえ、その是非を議論した。

《コルカタ会議での考察》

インド側では全体を通じて原子力以外の再生可能エネルギーへの関心が高かった。特に期待されていたのは水力発電で、現在インドが活用できる水力エネルギーのうち約3分の1しか開発できていないということから今後への展望は明るいという意見が議題①で見られた。水力には、エジプトのアスワンダム・アスワンハイダムの例からも分かるように使い方によっては土地を貧弱にしてしまうという側面があるという反論もあったがダムの過剰な利用については現状大きな危険性はないようだった。他には洋上水力発電による発電量の向上という案があり、新しい技術のため普及には時間がかかるが広まれば画期的な方法になるという意見で一致した。

議題②、③の原子力発電についてはインド側からは肯定的な意見が目立った。その中で日本側メンバーの政治的な側面でのデメリット（原子力輸出が隣国に脅威ととられる可能性）は大きな関心を引いた。日本の原子力技術と放射性物質があれば2週間で原子力爆弾が作れるという情報も出された。政治、経済、環境すべてを満たすような結論には至れなかったもののおおむね原子力の利用には賛成というメンバーが多かった。

《チェンナイ会議での考察》

チェンナイ会議ではインドの経済発展を見越した長期的な計画や地域間格差を考慮した議論が行われた。インド側は化石燃料のデメリットを考えればいつかは完全に再生可能エネルギーに移行せねばならず、その最大の候補は太陽光発電だとの主張だった。原子力は発電方法に大きなイノベーションが起こるまでのつなぎとして採用し、長期的には廃止すべきとのことだった。しかし、再生可能エネルギーは経済面のみ見れば非効率であり、火力発電との競合は難しいという欠点は指摘された。国の補助金により達成するという反論もあったが、ドイツの電力買い上げ政策を見るにある種の補助政策は失敗する危険性が大きい。再生可能エネルギーへの長期的な移行という点では意見が合致したもののその手段の決定は難しかった。

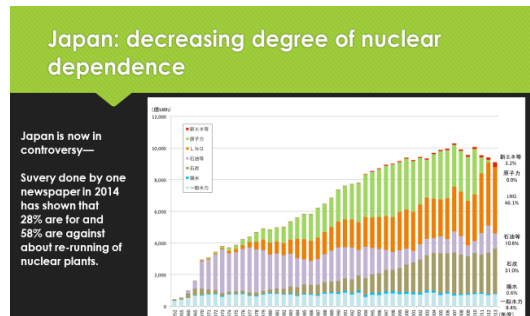
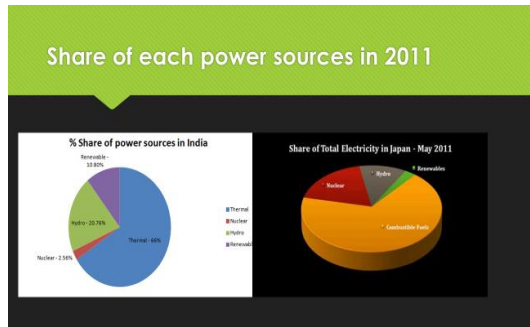
また電力が普及しておらず、存在さえ完全には把握されていない多くの村落については一時の投資で持続する太陽光パネルを設置することで現状は改善できるだろうと思われた。これはケーブルの長距離敷設が必要ないためでもある。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

同じ電力問題でも技術の刷新や各参加者の傾向で大きく結論が割れた。例えばコルカタメンバーは水力発電に大きな期待を持っていたが、チェンナイメンバーとの議論からは

インドの各州が大きな権限を河川に対して持っているために州を跨ぐ河川の利用は現実的ではないという新たな意見が得られた。インドの人口分布の偏りのために、使いたい河川の近くに用地が確保できないという事実も日本メンバーには新たな視点だった。インドでは土地収用が極めて難しいというのはヤマハ発動機や三井物産でも伺ったことであったが、地方政府でも思い通りにいかないというのは意外なことだ。理想のエネルギーミックスを話し合った議論①では、上記のような視点の違いで同じ国内でもかなり意見がまとまらないようであった。

対して原子力発電を焦点にした議論②、③ではどちらの都市でも原子力の利用に賛成で一致した。インドの学問面（特に工学）での著しい発展を感じるからか新たな技術の発明による解決を当然のように求めている。極端な意見では放射性廃棄物を宇宙に飛ばすことで廃棄するというアイデアも出された。ただ、自国内での原子力研究が盛んになってきている上に日本が原発を停止したため、日本からノウハウを輸入する必要は最早ないという主張はインド側学生のインドへの自信を感じさせたし個人的には日本のプレゼンスの低下を痛感させるものだった。このままでは日本が世界に対してもつ価値は失われていくのではないかという危機感も抱いた。



分科会で用いたスライドの一部

日本側プレゼンテーション インフラ部門 (INFRASTRUCTURE) II



《担当者》 右田 淳一

《テーマ》 : *Traffic jam and Congestion*

(渋滞と混雑の緩和)

《目的》

混雑を好む人はめったにいない。それが目的地へ向かう際に起こるものならなおさらである。

日本の満員電車は世界的に有名である。ホームに乘客を押し込むための駅員が配備されることは、一步外からみてみるとはなはだ可笑しい。一方のインドでも、都心ではクラクションが鳴りやまない。行列の合間をぬって進む二輪車が爆発的にヒットしたが、今度は二輪車どうして渋滞してしまう。

こうして奇しくも 10 倍の人口差をもつ国どうしが共通の悩みを抱えることになった。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

まず議論的をインドの交通渋滞に絞り、渋滞に起因する不都合を列挙した。発表者が考える渋滞緩和のための施策を三つ提示し、その実現可能性や効果の有無を議論した(①公共交通機関の利用推進・②新たな道路の建設や既存の道路の拡張・③運転規則の制度化と厳罰化)。

さらに、都市部への人口集中について、「人口集中を問題視するか」「歯止めをかける方法は考えうるか」「人口統制政策は適格的か」などこの議題から浮かび上がる論点を自由に話し合った。

《コルカタ会議での考察》

①に対しては悲観的。たしかに自動車や二輪車が減れば数という点で交通状況は改善されるが、バスのマナーは総じて悪く(例えば、道路の真ん中で客を乗降させる、転回して交通の流れを妨げる)、普及したバスがかえって混雑の要因になる。

②に対しても悲観的。渋滞の緩和のために道路を拡張したとしても、その分だけ露店が進出して道路をふさぐから効果がない。

③は肌感覚ながら効果的だと思っているようだった。検定試験の難易度などの運転免許の交付基準は一時代前に比べて相当厳しくなっており、その影響で一般に若い世代の方が丁寧な運転を心がけるらしい。

《チェンナイ会議での考察》

①に対しては悲観的。国内で自動車が広く普及しているだけにバスを利用する客層は低いランクとのイメージがあり、利用を推進するためには意識改革が必要になってくる。

②に対しても悲観的。政府が道路を建設するとなると、市民の大規模な反対デモや市民を支持母体とする政治汚職が横行し、結局撤回されるケースが非常に多い。

③については限界があるものの一定の効果があると判断された。交通ルールを守らせるための装置は現存し制度化や厳罰化の試みはあるが、警察官と違反者の間で闇取引が成立し罰金が減額される。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

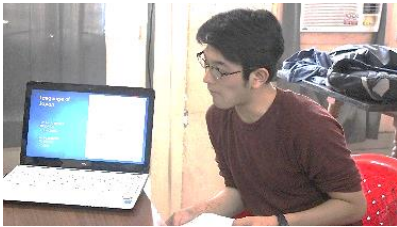
当初、結論にたどり着きにくいトピックを選んだことを若干後悔していたが、コルカタの渋滞を目の当たりにして自分が間違っていないと確信した。コルカタの学生とチェンナイの学生が異なる理由で二つの施策を否定し、運転マナーの徹底に可能性を見出していたのが面白かった。

IITの学生から「be more critical」と言われたり、経済学部生ゆえに経済学の観点を求められたりして世界屈指の大学からの洗礼を受けた気分になった。議論に詰まったら論理の展開を見直す思考法や、短い時間でも結論を出そうと努力する姿勢に、今後の勉学への取り組み方を意識させられた。



分科会で用いたスライドの一部

日本側プレゼンテーション 教育部門 (EDUCATION) I



《担当者》川瀬 承

《テーマ》: *Social influence by English*

(英語化による社会的影響)

《目的》

日印両国共に国をあげて英語が重要視されている。日本ではグローバル化、インドでは植民地政策により英語が広く話されるようになった。日本国内においては小学校から英語教育を開始する方針が出る等、国をあげて英語化が当然とみられる風潮がある。英語化による欠点はインド国内においては貧富の差となって見られるが、我々にとって本当にこの方針で良いのだろうか。

英語化教育政策がもたらす環境の変化を、日印両国の目線から話し合うことにより、今後起こりうる利点・欠点を見つけ出したい。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

始めに、日印両国で話される言語の説明を行った。日本語とアイヌ語がある日本と、多言語をもつインドによる言語の使用方法和考え方を話し合ったうえ、日印両国による英語の受け取られ方やなぜ英語を取り入れているのかを話し合った。「①. 思考する時に英語か母語どちらを使うか」「②. 自分の子供に学校教育では英語か母語どちらで教育を受けさせるか」「③. 日印両国において英語はどのように変化するか」を議論のテーマとした。

《コルカタ会議での考察》

議論①、全体としては、母語で思考するものが多かった。中には、

その時使っている言語で思考するものも見られた。

議論②、最も意見が分かれた議題であった。急きよ、両方重視するとい

う選択肢を増やしたため、参加者の意見が三等分になった。

英語を重要視する意見には、英語で計算はできて母語で計算ができないといった、嘆きが聞こえた。その一方で、インドにおいて多言語の中でも英語を使うことで意思の疎通が行いや

すいという理由のもと、英語を推す意見もあった。日本人メンバーにおける、英語のみの教育を受けさせたいという希望者はいなかった。

議論③ 全体の意見として、インドにおいてはグローバル化の波による影響よりは、多言語が話される環境における共通言語として英語が必須という結論に至った。日本では、グローバル化の影響が強いため英語の広まりは進むというメンバーが多かった。

《チェンナイ会議での考察》

議論①、チェンナイ会議においては、母語英語の思考が半々に感じた。

議論②、母語のみの教育を希望する声は上がらなかった。英語のみの意見が両方の言語による教育を上回っていた。

議論③、全体的に英語使用の機会は増えていくとの意見で一致した。ある学生の意見として、インドの国語の制定を希望する声もあった。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

日本において言語は日本語といっても過言ではないが、インド人にとっての言語とは個々によるということをもより深く知った。英語を好んで使っているという意見はなく、日常生活で必要に迫られて使うという印象を受けた。現代日本において、各都道府県の方言が都道府県公用語となると想像してみたが、何とも不便に感じる。多言語を操るインド人に対し驚きを感じるとともに、英語使用の必然性を感じた。言語に関し適応能力が高いことから、現在インドが飛躍する一要因なのだと思う。

会議進行に関しては、とても苦戦した。テーマや議題選定に関しては良かった。しかし、自らの英語力の乏しさに加え、インド人学生の話す速さには太刀打ちができず、多くの手を借りた。最大の反省は語学力ということだろう。

参加してくださった方には大変感謝している。

日本側プレゼンテーション 教育部門 (EDUCATION) II



《担当者》酒井 美和

《テーマ》 : *Leprosy problem*

(ハンセン病問題)

《目的》

ハンセン病は世界中で古代から忌み嫌われてきた病気の一つである。現在は治療薬も開発され、治る病気となったが、いまでもなお、ハンセン病やハンセン病患者・回復者への差別意識は消えない。日本でもかつて隔離政策や、その他ハンセン病差別を助長する政策がとられており、決して見逃すことのできない歴史である一方、この事実を知る機会はあまりない。また、インドは現在もなお多くのハンセン病新規患者が出ており、国内に患者や回復者が多く存在している。そして、彼らに対する差別も無くなったとは言いがたい。インドはハンセン病撤廃に向けて動いているが、今後課題となるのは人々がハンセン病に対して正しい知識を持ち、いかに彼らと共存していくかということにある。ハンセン病だけではなく、世界では様々な差別が起こっているため、今後他の差別問題を考える際にも共通する考えが多いのではないかと考える。

今回のディスカッションを通して、インド・日本人学生のハンセン病に対する知識、考えを共有し、この問題の解決への第一歩を踏む。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

ハンセン病の概要、インド・日本各地での歴史を述べ、現状を示した。

《コルカタ会議での考察》

ハンセン病という言葉は聞いたことがあるが、どのような病気か知らないという学生が大半であった。また、遺伝病であると勘違いをしている学生もいた。学校でハンセン病について触れられる機会もなく、漠然とハンセン病に対してネガティブなイメージのみを抱いているようだった。

しかし、一人の学生は今までにハンセン病コロニーを訪問した経験があると言っていた。彼は、インドハンセン病問題のポジティブな側面についても言及していた。それ

は、手に後遺症を持つハンセン病快復者のクリケット選手が多くの人に愛されているというものだった。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

プレゼンを真剣な表情で聞き、真剣に考えを共有してくれたメンバーに感謝したい。プレゼンの最中から多くの質問や、意見の提示をしてくれたため、ディスカッションが白熱した。

私は、西ベンガル州にあるハンセン病コロニーで活動を行っている。インド人の学生のハンセン病への見解に以前から関心があった。また、ハンセン病問題解決には学生が正しい知識を持つことは極めて重要であると考えている為、渡航前から分科会がすごく楽しみであった。

日本とインドのハンセン病の現状は大きく異なるが、どちらもハンセン病に対してあまり知らないということがわかった。また、その中でも、コロニーへ足を運んだことのある学生がいたことにとっても感動した



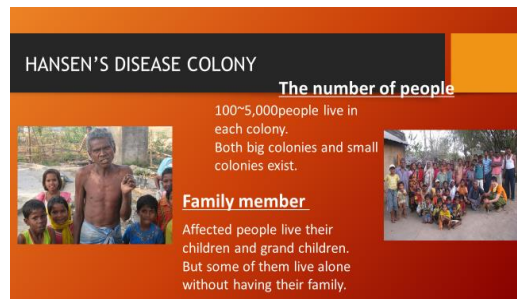
Period 1
Hansen's disease is a chronic bacterial disease caused by M. Leprae.



Period 2
M. Leprae mainly affects the skin and nerves but it is not very infectious. 99% of people have a natural immunity to it.




Period 3
If treated early, it can be cured without impairment or permanent disability.



HANSEN'S DISEASE COLONY

The number of people
100~5,000 people live in each colony.
Both big colonies and small colonies exist.



Family member
Affected people live their children and grand children. But some of them live alone without having their family.



分科会で用いたスライドの一部

日本側プレゼンテーション
教育部門 (EDUCATION) III



《担当者》小泉 晴香

《テーマ》 : *Sexual education*

in India and Japan

(日印における性教育)

《目的》

私たちはこれまで性に関する教育をどれだけ受けてきたでしょうか。日本では性に関する知識を扱うことはどこか恥ずかしく、教師自身も詳しく教えることを避ける傾向にある。また月経についての授業を女子だけを対象に行うなど、男女での性に関する知識の共有が行われていない。そのため東日本大震災や熊本地震において、男性の月経に関する無知が露呈された。またインドでは性教育自体が一切行われぬ。インドは AIDS 感染者が世界第 2 位であり、対人口では 200 人に 1 人ではあるが人口が多ければ多いほど多様で深刻な問題が存在するのだ。そしてインドでは性的暴行事件が多発し、日本は ILO から毎年勧告を受けるなど性に関する問題がある。このような問題について語ることさえ避けられる性について、まずはお互いの意見を述べ合うことから始めたい。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

はじめに、これまで性教育を受けた経験があるか問いかける。メンバーの反応を確認したのち、インドの性教育の実情と問題を提示した。まず周知のことではあるが、インドでは性行為自体は問題ないが性について話すことは文化的タブーであることを確認。そして約 47%の女性が 18 歳未満に結婚をし、約 28.5%が 18 歳未満で子ども授かっていること。さらに約 53%の子どもが性的虐待を経験しているという問題を紹介した。先にも述べた文化的タブーによって多くの学校では性教育が行われていない。また国の保険大臣が性教育は不必要であると述べた事例を提示した。これらのことがこれらの問題の発生に影響を及ぼしていることを示唆する一方で、個人や私立学校では性教育を行う動きが見られつつあること示した。次に日本の性教育の実情と問題を提示した。インドと対比する形で性について話すことはタブーではないことを確認。性教育も行われているが内容が不十分であり、その子が子どもたちの好奇心を刺激、毎日 53 人が人工妊娠中絶をしているとい

う問題を提示した。ジェンダーにも関わる問題として東日本大震災において男性が月経に関する知識がない故に生理用品が被災地に届かない、思いやりのない言葉を浴びせられるという自身の追い日本ならではの問題も示した。その後ディスカッションのために 2 つの国の抱えるこれらの問題を受けて「性教育は必要か」「どの範囲までの教育を行うか」「誰が誰を対象に行うべきか」「どのような方法を用いて行うべきか」という質問を提示した。

《コルカタ会議での考察》

コルカタでのディスカッションは時間の関係上十分に行うことができなかった。インドでは私の予想通り基本的に性教育は行われていなが、9歳か10歳の頃にワークショップの形式で単発の性教育の授業が行われるだけだという。そのような教育環境を不十分だという意見は全員が持っていたが、あまりこの話題を話すことにインド人メンバーは気乗りしない様子であった。また通訳に入っていた4、50代の男性が私のプレゼンテーションを観たときの怪訝な顔は若者以上に大人たちがこの分野について話すことを避ける傾向にあると感じさせられた。ディスカッション終了後1人の女子メンバーがこちら近づき自分の周囲では性に関わることを冗談交じりで話すこともあると伝えてくれた。あえてディスカッション中に発言しなかったことからこの話題に対しての姿勢が若者の中でも保守派とそうでない者で考え方にばらつきがあることを感じた。

《チェンナイ会議での考察》

日本人1人に対してインド人複数人の形式でディスカッションを行った。少人数ではあったがメンバーの出身地が異なっていたため、様々な地域における性教育の実情を知ることができた。コルカタでは性教育全く行われていないか行ってもワークショップのような単発の授業だけで不十分な環境であるという状況を知るだけにとどまってしまったが、ここでは性教育に力を入れようとしている学校が増加傾向にあり、10年後のインドは今とは別の状況にあるだろうという声を聞くことができた。また私が興味を持っていた学校に行くことができない家庭環境にある子どもに対する性教育に関しての意見を仰ぐと、まずは基本5教科のような学力を高めるための教育が最重要視されるため難しいだろうというものであった。性教育の必要性は感じつつも現在大きな発展を遂げつつあるインドにおいては就職に結びつく、経済を潤す知識以外の教養はないがしろにされてしまう傾向にあると感じた。日本との共通点として度合いは異なるものの性教育の不十分さが子どもたちの性に対する好奇心を高めさせているということだ。インドでは学校で学ぶことのでき

ない性の知識をインターネットや友人から得るケースが多く、その多くが間違いを含んでいるということであった。子どもの失敗を防ぐためにも十分な性教育の必要性を感じさせられた一幕であった。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

コルカタとチェンナイではこの話題に対する熱量が明らかに違うように感じた。コルカタでは他のトピックで積極的に発言する学生もどこか消極的になっている印象であったが、IITの学生は自分たちの性に関する経験や今後のインドの性教育について熱く語ってくれた。どちらかの立場を示すような問いを作ることができなかつたため、自分の経験や意見を述べるという形になってしまい、あまりディスカッションのようにならなかつたことが反省点である。しかしお互いの経験をととても興味深く聞いている様子から普段このような話題について話すことが少ないことを感じ、性について話すという良い機会を作ることができたのではないかと手ごたえも感じた。


SEXUAL EDUCATION IN INDIA

- not included in the curriculum
- Harsh Vardhan Health Minister's word
- private school and individual



SEXUAL EDUCATION IN JAPAN

- included in the curriculum
- class about period is only for girls
- don't touch about how to sex



分科会で用いたスライドの一部

日本側プレゼンテーション
文化部門（CULTURE） I



《担当者》 葛原 南美

《テーマ》 : *Empowerment of women*

in the society

(社会における女性の影響力)

《目的》

2015年の世界男女格差指数によると日本は135か国中101位、そしてインドは108位と両国とも下位であるものの順位之差はそれほどない。ジェンダーレスや女性の社会参画が叫ばれる今のご時世、日本はG8の一員でありながら圧倒的に男女格差指数が低い。またインドも女性軽視が文化や伝統として受け継がれているという声が大きく実際に指数に表れている。データとしてはこのように評価される両国であるが、実際のところ両国で生きる女性にとって社会の風はどう感じられるのか、女性の人権が侵害されているような事件を見てどう感じるか、両国の女性と男性を客観的に考察することでより両性にとって生きやすい社会実現の鍵を探す。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

世界で活躍している女性著名人としてアメリカの大統領候補ヒラリー・クリントン、英国の新首相テリーザ・メイや新東京都知事小池百合子を紹介した後、統計として2015年の世界男女格差指数を示し両国のジェンダー問題を提示した。両国において共通する問題が多々あるが、日本の問題としては、セクシャルハラスメント、女性の家事の負担の大きさ、夫婦同姓、女性の管理職割合の低さを紹介。インドの問題としては、お見合い結婚、サティとダウリー、識字率の性差、レイプ問題を紹介した。インドの問題に関しては知識やメディアの情報でしか語れないためインド人にも紹介と説明を求めた。その後、ディスカッションに持ち込むために「もしあなたが男/女だったなら」「あなた自身の意見として」の3部に分けて2つずつ議論の話題を提起した。「自分の妻に外で働いてほしいか」「女性を雇用しようと思うか」「会社の中で昇進したいと思うか」「産後に職場復帰したいと思うか」「就職する時に性差はあると思うか」「女性の管理職や政治家が増えると社会は良くなるのか」の6つの質問を順番に議論した。

《コルカタ会議での考察》

分科会メンバーのインド人はみな女性だったため、性比の偏りにより意見も自分が想像していた通りの方向に流れた。また、メンバー内に社会学を専攻している人が多かったため、性差の問題に興味・関心を持ってもらいやすかったように思える。ディスカッションに入る前にインド人メンバーがプレゼンで話にあがった、インドの伝統的な慣習である『サティー』『ダウリー』に関する説明をしてくれた。日本の問題に関しては、最近話題に上がった夫婦別姓について話すと、インドでは自分の今までの名前に夫の苗字を後ろに加えるが、今は加えない、つまり夫婦別姓の選択肢もあるそうだ。日本では結局、夫婦別姓を選択できないという判決が出たため、選択肢という面ではインドのほうが先進的だと感じた。また育児休暇制度に関しても、インドは政府系の会社だと産後1年間は保証されているが、民間の会社だとわからないそうだ。日本も似た点はあるが、教育や社会保障、何事においても法律や制度として社会を整えたとしてもそれが人々の生活に実際、根付いて効果をもたらすことは簡単ではない。最後に日本人インド人共通の意見として挙げられたのが、女性の雇用の問題は性別よりも能力に準ずるという意見だった。大学まで進学できている彼らそして私たちの意見としてはそのように言うことができるが、それが全てのインド人の意見ではないことは明らかであるので、一階層の一意見として受け止めた。

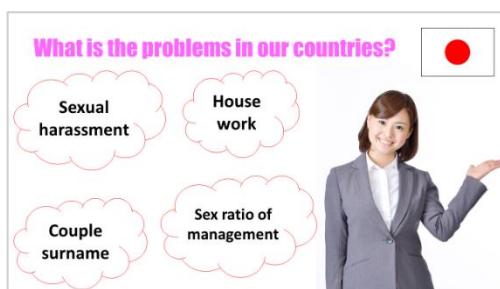
《チェンナイ会議での考察》

日本人1人につきインド人学生が2~4人の小グループになってプレゼンを聞いてもらった後、ディスカッションをする形式だった。ディスカッションした相手は男性2人と女性1人だったため、初めて自分のプレゼンをインド人男性に見てもらう機会に恵まれた。コルカタと比べ少数でプレゼンしたため、気軽に質問をしてくれたり、自分の英語を親身に聞いてくれてありがたかった。コルカタ同様、私の思った通りの意見を得られたが、それに加えてインド人学生の経験談を聞くことができた。例えば、大学の休み期間アルバイトをした時に感じた性差。ある種の工場で短期バイトをしたら女性は家庭的・安全的な面から午前のシフトしか働けないそうだ。また日本同様、管理者層と労働者層において管理者層に女性はいなかったそうだ。しかしディスカッションした1人の女学生は、ペプシコのインド人女性 CEO インデラ・ヌーイに憧れて会社で昇進して CEO になることが夢なので、女性の意思としては昇進願望が少なからずあると考えられる。よってそれに対する社会の理解や寛容さが必要だと思う。会社における雇用の際に女性を採用したいかどうかに関しては、新たな視点をとり入れるため、また社会で働く母親の姿を見て女の子の教育に対するやる気を高めるため、といった理由から肯定的な意見が男子学生から出た。教育制

度に関してよくある問題ではあるが、制度を整えたとしても子どもの学習意欲や親の教育意識の改善が難しいという。だからこそ積極的に女性、母親が働くことで社会にも家庭にも良い影響をもたらせると考える。そのためにはインドも日本も女性が働きやすいように雇用体系や子育ての環境を改良させることが大切であり、それらが教育の改善にもつながる。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

地域というよりは大学によって意見や視点が異なることが興味深かった。コルカタでの分科会はインド人学生側からもそれぞれ興味があるトピックに関するプレゼンがあったため、双方にとっての学びがあった。テーマごと4つに分かれたグループでディスカッションし、自分のグループは「文化」がテーマだったため、ある程度女性の社会進出には興味関心がある学生が多く、相手にも熱が入る場面があったように思える。それだけインド社会の性差に問題意識を持っているということの証だと思うので、改善に繋がって欲しい。またチェンナイの分科会は IIT(インド工科大学)のが学生とディスカッションしたが、IITの学生はインド全土、または国外から集めてきているためチェンナイの特質といったものは感じられなかった。しかし IITの学生はほぼ全員「どうすればもっとインドは発展できる」「インドの何が問題だと思う」とコルカタでは聞かれなかった質問をされた。IITの学生として自分の生きる国インドを真剣に良くしようという意志を感じた。反省として、日本人メンバーは日本人側のプレゼン内容は総じて把握しておいたほうがインドで実際、議論やプレゼンする時の手助けという点で有効だと感じた。また、ある程度想定される質問に対する答えやデータ、表現方法はできる限り準備しておいたほうが有意義な議論を進められたと思う。



分科会で用いたスライドの一部

日本側プレゼンテーション 文化部門（CULTURE）Ⅱ



《担当者》水谷 亮太

《テーマ》：*The job hunting system*

of Japan and India

（日本とインドの就職活動について）

《目的》

日本の就職活動のシステムは、新卒一括採用という形態をとっている。世界で見ると、この採用方法をとっている国はとても少ない。私はこのシステムの下就職活動を行った。経験ベースで、新卒一括採用の良い点・悪い点を挙げ、第三者の視点としてインド人学生がどのような考察を行うかを聞き出したいと考えた。また、システムの違いから生じるであろう仕事に対する考え方の違いについて議論を深めたい。これからの経済活動を担う私たちが仕事について議論を行うことはとても重要であると考えた。加えて、お互いの国の仕事に関する考え方の違いを共有することによって学生たちが視野を広げ、将来の働き方や職業選択の際に役立てることが出来ることが最終目的となる。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

プレゼン概要は、日本の就職活動の現状について説明を行った。日本は、新卒一括採用という採用方式を採っている。この採用方式は、世界的には特殊なものである、その原因は、日本の終身雇用制にある。新卒一括採用のメリット・デメリット比較を行った。その後は、「日本の就職活動のシステムについてどのように考えているか。」「あなたにとって仕事とは何か。」「どのような仕事をしたいか。」という問いを投げかけた。

《コルカタ会議での考察》

一部のインド側の学生は、日本の新卒一括採用と終身雇用制について賛成していた。一方で、日本の学生の多く（理系を除く）が大学院に行かず、就職することに対して違和感を抱いている学生が多かった。インドでは、大学院に進学しないと、良い職業に就くことが出来ないということであった。インドでは、多くの人が2・3年で転職するため、終身雇用制自体には賛成であるが、インドにおいて終身雇用制は採用され得ないという意見も上がった。日本と比較した場合、報告者である私が文系ということもあるが、学生時代に

勉強したことを仕事に繋げようという意識は、インドの方が圧倒的に高いと考えられる。インドに関しては、文系・理系問わず、そのような傾向が見られたので、日本の学生も学ぶべき部分は多いのではないかと思う。

《チェンナイ会議での考察》

IITの学生の就職活動は、非常に日本に近い形で行われている印象を受けた。企業が大学側に来て、説明会を行い、その中から基本的には企業選択をする。インドでは、受けられる企業が大学毎によって違い、同じ会社に入社した場合でも、出身大学によって給料が違うということである。コルカタでは、勉強していることが仕事に繋がるという人が多い印象を受けたが、IITでは、より給料の高い職業（金融、コンサルタント）が人気ということが実態としてあるということが分かった。日本と比較して、学歴社会が非常に強く根付いていた。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

全体的に、インドの学生は日本の学生と比較して、より早い段階で自分自身の仕事について考えている印象を受けた。それは、大学での勉強が仕事に繋がるが多いため、または専門性を高めていかなければ、良い職に就けないという現実起因すると考えられる。反省点としては、私が、日本の就職活動について紹介し、インドの就職活動について聞くという形式をとったが、私自身がインドの就職活動についてより知識を深めた状態でしたら、より深い議論が行うことが出来たと思う。

Job hunting system in Japan ②

2. Go to the explanatory meeting that enterprises each having the interest open.



Job hunting system in Japan ③

3. Submit each's resume to some companies and interview multiple times in companies.



分科会で用いたスライドの一部



《担当者》土屋 直之

《テーマ》 : *Rethink the view*

of life and death

(死生観について)

《目的》

人間あるところに思考あり。それは *L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature ; mais c'est un roseau pensant.* の言葉に代表される通りであろう。しかし、その思考は様々である。生まれ育つ環境が異なれば、価値観も思想も異なるのは当然のことであろう。

多様な人間の集う機会に哲学的考察を行うことは非常に価値のあることだろう。実際、プラトンの描くソクラテスの「知的活動」はポリスで行われた他者との「対話」であった。そこで、今回は哲学的考察の第一級の課題「生と死」について問い直した。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

人間は死から免れない。それを踏まえ、ディスカッションのテーマとして用意した問いはただ一つ、「あなたの人生の意味とは？」である。勿論、この問いは非常に難解であるのは言うまでもないし、「解答」だって存在しないだろう。それこそ、人の数だけ答えがあるはずだ。それでは議論にならないため、まず私自身の現時点での考えをサンテグジュペリの『星の王子さま』やシェイクスピアの『ハムレット』、『マクベス』等を引用しながら紹介し、その後意見を求めるという形で議論を進めた。

私自身の結論を簡潔に述べると、以下の通り。問いに対する解答は保留。ただ、認識の次元を、あるいはパラダイムを拓げることで、人の生き方というものは変わっていくものであるとした。これは、デカルト的な二元論を乗り越え、新たな次元での認識に達しようとするといった、ヘーゲルが弁証法の中で提唱したアウフヘーベンが根底にある。従って、人生の意味はまだ分からないが、人生の指針はパラダイムを拓げることで、そしてその結果、私の問いは達成できるであろうと結論付け、異なる思想、背景を持った学生の集まるこの会議はその第一歩であるということを目指した。

《コルカタ会議での考察》

インド側の意見を求めたところ、私の考えは大きく賛同を得られた。それは概ね私の結論と一致するものであったが、一つ大きく異なったところがあったとすれば、人生の意味の理由を神に帰していたことが挙げられる。つまり、この命は神に与えられたものであるが故に、自らの生には意味がある、換言するならば、何かしらの使命を持って生まれてきたのだ、としていた。

《チェンナイ会議での考察》

インド側から、新たな意見が得られた。そもそも人生に意味などなく、他者との関わりの中で意味が付与されていくという考え方が提示された。ここで論点となるのは、他者との関係が希薄にならざるを得ない環境や状況下（例えば貧困など）の人々について、である。議論はさらに深まり、そもそも人間であるとは何なのか、すなわち他の動物と人間を明確に区分する基準は何なのか、という点まで深まった。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

まず、選んだテーマが難解すぎた点が挙げられる。このプレゼンテーションは、コルカタでは人気を博したが、チェンナイでは理系の学生がほとんどであったこともあり、とっつきにくいテーマであったようだ。シェイクスピアの作品を読んだことがないという学生も中にはおり、私のテーマが敬遠された理由の一つでもあろう。

一方、そのような中で私のテーマに関心を持った学生たちは、哲学や文学に精通している「賢人」であったことは言うまでもないだろう。アメリカの詩人ロングフェローは、*A single conversation across the table with a wise man is better than ten years mere study of books.* と述べたが、まさにそれを体現したかのようなディスカッションであったように思われる。知者たちと議論を交わしたこの経験に今一度感謝の意を示したい。



《担当者》：安達 亮太

《テーマ》：*Regional differences*

in India and Japan

(日本とインドにおける地域間格差)

《目的》

インドにおいて産業は都市部や臨海部に集中しており、農村が多い内陸部と比較すると人口や一人一人の収入、インフラストラクチャーの普及といった面で大きな差が生まれてしまっている。一方、日本における地域間格差はより顕著であり、名古屋や大阪といった大都市もあるものの人や産業は東京に集中しており、格差は拡大の一途をたどっている。このように両国共通といえる地域間格差という問題に対する解決策を考える。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

まず、両国における地域間格差の現状について説明し、その後日本とインドそれぞれにおいて「産業は一定の地域に集中すべきか否か」というテーマでディスカッションを行った。

《コルカタ会議での考察》

インド側のメンバーは、インドにおいては産業を一定の地域に集中させるべきだという意見で一致していた。というのもインドは日本と比べ国土が大きいので地方に産業を分散させ、格差を是正することは難しいと彼らは考えており、デリー、ムンバイ、コルカタといったいくつかの大都市に産業が集中している現状に賛成のようだった。一方、日本のように国土が小さい国では地方にも産業を分散させるべきという意見が多数であった。また、私が日本において都市部と地方による格差が拡大していることを説明すると、インド側のメンバーから「豊かな生活をしているため、貧しい人のことは考えない。」との意見が出た。彼らは自分たちの生活にある程度満足しており、また就職や学業といった個人的な問題を考えることで精一杯であるため、貧しい生活をしている他人のことまで考える余

裕はないとのことであった。加えて、法律によって収入税の30%が貧困層に充てられることが規定されているものの、汚職によってお金が回らないという現状もあるようだ。

《チェンナイ会議での考察》

チェンナイ会議では、コルカタ会議とは一転してインドにおいてももっと産業を地方に分散させるべきであるという意見が多かった。また、第2次産業や第3次産業を地方に分散させるのではなく、第1次産業を発展させることで農村が多い内陸部と都市部との格差を是正すべきとの意見もあがった。というのも、インドはただでさえ日本より人口が多い上に、農業従事者の割合も日本より高い。加えて、インドでは親戚と一緒に住んでいるケースが多いため、一人当たりが所有する農地が日本に比べて狭いのである。そのためインドにおいては、農民一人当たりが所有する土地を増やすためにもまずは第2次産業や第3次産業が発展し、それに従事する人が増えることが必要なのではないかという結論に至った。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

興味深かったのは、会議を開いた地域によって意見が大きく異なった点である。インドは州によって言語も文化も違うため、やはり考え方も違う。2都市で開催することにより、そういった違いを感じられたことは自分にとっては非常に貴重な経験であった。

日本側プレゼンテーション

科学と社会部門 (SCIENCE AND SOCIETY) II



《担当者》 新田 杏奈

《テーマ》 : *Territorial disputes*

(日本とインドが抱える領土問題について)

《目的》

日本は竹島、北方領土、尖閣諸島の領有権を巡って、それぞれ韓国、ロシア、中国との間に 3 つの領土問題を抱えている。日本は相手国と長年交渉を試みているが出口の見えない膠着状態は現在も続き、この問題が日本の外交にも大きな影を落としている。しかし、世界を見て見ると領土問題は何も日本だけの問題ではないことがわかる。世界の領土問題は、隣国同士の土地の奪い合いの遺恨の歴史に加えて、資源の権益やまた宗教や民族問題が絡み、非常に複雑かつ多様化してきている。その中で、インドもまた国境線を巡って中国とカシミールを巡ってパキスタンとの頭の痛い領土問題に悩まされる国である。それぞれ事情は違えども、どうすれば、領土問題は解決ができるのか、インドと日本が共通して抱える「領土問題」をテーマに互いを比較しながら、外交問題の平和的解決策について考える。

《プレゼン概要・ディスカッション内容》

まず、両国における領土問題の現状について説明し、両者を比較しながら、日本とインドそれぞれにおいて「日本とインドが抱える領土問題に平和的な解決策はあるのか」というテーマでディスカッションを行った。

《コルカタ会議での考察》

日本の領土問題に対して一まずは実効支配のない尖閣諸島から優先的に交渉すべきという意見が多かった。排他的経済水域における海洋資源については日本、中国、台湾で共同採掘できないかという提案があった。議論全体を通して、ギブ&テイクを重視した客観的な議論ができた。

インドの国境紛争に対して一インド政府のカシミール問題への干渉には否定的な意見が多かった。どちらかの領有ではなく藩王による独立自治を認めたほうがいいのではない

か、という意見もあった。どちらも領有しないという意見はある意味、フェアであり新鮮な意見であると感じた。

《チェンナイ会議での考察》

日本の領土問題に対して—コルカタと同様に、尖閣諸島における資源分割利用の意見が出た。ただし、拡大化する中国の動きは世界でも共通の問題であり、対策が必要だという意見もあった。

インドの国境紛争に対して—中国との国境紛争問題に対して、アクサイチンを中国領としてアルナチャーデルプラデ州をインド領とする交渉案が出た。中国が実効支配しているアクサイチンは資源も少なく、インド人もあまり住んでいない。一方で、インドが実効支配しているアルナチャーデルプラデ州は資源もあり、インド人も住んでいるので、现阶段の実効支配を両国が正式に認めれば、それが最も良い解決策になるのではないか、という結論になった。

《会議全体を通しての考察・感想・反省》

コルカタでも、チェンナイでも、解決策を考える中でお互いのギブ&テイクをより重視した客観的な議論が出来た。。また、実際に議論してみて、インドの学生の外交問題に対する知識の深さに驚かされた。しかし、一方で自国の政治に対する期待値はそれほど高くなく、自国の外交問題に対しても冷静な立場で議論する学生が多かったように思う。また政治問題に関して、インド全体の意見を述べるというより、州単位(自らの生活圏の中)で答える学生が多かった点が日本と異なっているように感じた。相違点も共通点も、議論して初めて知ることばかりであった。全体を通して、学ぶことの多い充実した議論が出来たと思う。



分科会で用いたスライドの一部

6. 文化活動報告



KOLKATA (コルカタ)

8月11日

◇開会式◇

ジャダプール大学のセレモニーホールにて、第20期日本インド学生会議のコルカタ本会議の開会式が行われた。開会式には在コルカタ日本国大使館、日本語会話協会を始め多くの方々が参列くださり、日本人の学生メンバーは、ソーラン節の披露や、コルカタ学生から事前にリクエストのあったSMAPの「世界に一つだけの花」の合唱を行った。

また、インド人の学生メンバーは伝統的なダンスや歌を披露してくれ、特にインド人メンバーが日本の「花が咲く」という歌を日本語で歌ってくれたのが感動的であった。



8月12日

◇文化交流会◇

文化交流会では、開会式で踊ったソーラン節の一部をインド側メンバーと共に練習したり、インド側のメンバーがメヘンディと呼ばれるインドの伝統的な装飾を手にしつけてくれたりしてお互いの文化を体験し合った。また、女子のメンバーはサリーの着付けも体験させてもらい、インドの学生が持ち寄ってくれた色とりどりのサリーにテンションが上が

った。着付けの後にはインド流の化粧まで施してもらい、とても楽しい時間を過ごすことが出来た。



8月13日

◇NGO：『Child Care Home』訪問◇

様々な事情で親元を離れた女の子たちを預かって支援している「Child care home」というNGO団体を訪れた。HOMEの女性の方に施設を案内していただいたが、裁縫の技術や、踊りの指導など、子ども達それぞれの得意な分野を現実的に伸ばすことが出来るような教育が行われており、単に子どもを養うだけでなく、将来一人一人が自立していけるような仕組みが十分に考えられているように感じた。また、代表者の女性の方からお話が聞くことが出来て、とても勉強になった。実際に子ども達の踊りも披露して頂き、その後の交流の場では施設の女の子たちに踊り方を教えてもらうことができた。

◇ガンジス河見学◇

コルカタ市内の教会を観光した後、ガンジス河を見学することが出来た。写真で見たことはあったが、実際に初めて訪れると感慨深かった。ヴァラナーシーほど人はいなかったが、ペットボトルのようなもので水を酌んでいる人もおり、やはり聖なる河であると実感した。ガンジス河沿いのベンチではたくさんのカップルを見かけ、コルカタの若者にとってデートスポットとなっているようだった。ガンジス河をしばらく眺めた後、ガンジス河が望めるアイスクリーム屋さんでインドの学生とおしゃべりしながらアイスクリームを食べた。



CHENNAI (チェンナイ)

8月23日

◇日本文化祭◇

私達がチェンナイで大変お世話になった ABK-AOTS-DOSOKAI 主催の日本文化祭というイベントが CIT (Chennai Institute Technology) という大学で行われた。JISC メンバーもそのイベントにご招待いただき、ソーラン節や合唱を披露することになった。

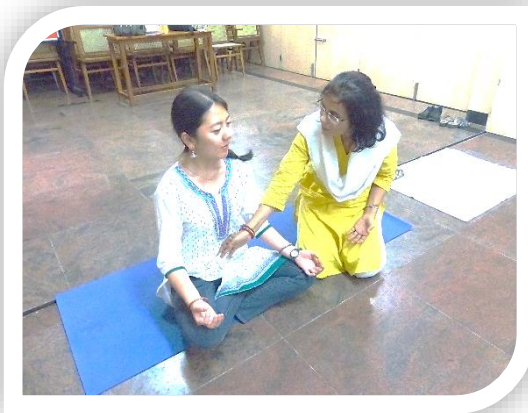
実際に会場についてみると CIT の学生さんで会場は満席であった。イベントの中では日本のひな祭りや、子どもの日の祭りなどの季節のお祭りについてのトークショーや、折り紙の実演会など日本の文化がたっぷりと堪能できる内容であった。イベントの途中では JISC のメンバーが壇上にあがって CIT の学生から日本について質問を受ける場面もあった。理系の大学であったので日本の科学技術に対する突っ込んだ質問もあって、戸惑うこともあったが、日本に興味を持っているインドの学生と直接対話することが出来てとても充実した文化交流が出来た。



8月25日

◇ヨガ体験◇

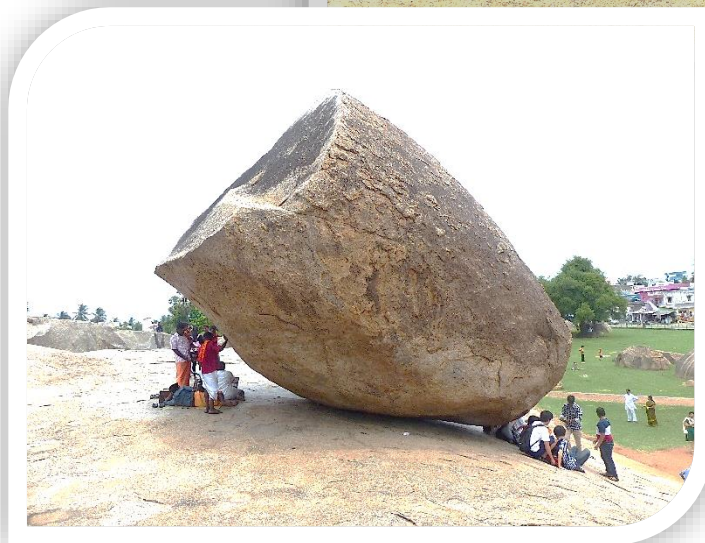
インドといえばヨガ。そんなイメージを持っていた。日本ではエクササイズとして捉えられがちだが、インドでは古くから修行の一環として考えられてきた。その範囲は多種多様でインドのヨガの世界は想像以上奥深かった。せっかくインドに来たのだからと、ヨガを体験してみたが、簡単そうに思えるポーズも実際やってみると本当に難しかった。普段ろくに運動もせず、体も固い私には初歩とは言え、中々大変だったが、実際終わってみると不思議と身体も心も少しリフレッシュできた気がした。



8月27日

◇マハーバリプラム観光◇

世界遺産マハーバリプラム。クリシュナのバターボールという名前の巨大な石が特に有名らしい。実際に行ってみると本当に巨大な石の塊が岩の斜面で静止していた。岩の斜面を滑り台のようにして遊ぶ人もいるくらいに急な斜面であったが、あれほど巨大な物体が微動だにしないのは見ていてとても不思議な光景だった。





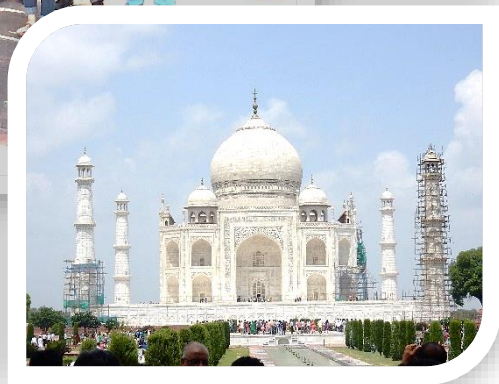
DELHI (デリー)

9月3日

◇アグラ観光◇

IJES 日本語学校の学生さんと共に、インドでも1, 2を争うほど人気の観光地アグラへ出かけた。アグラまでは、4、5時間ほどかかる長い道のりであり、早朝、デリーを出発した。

お昼頃にアグラに到着して、いざ観光。ムガル帝国が残した世界遺産、タージマハルの実物は圧倒的な美しさであった。運よく空もきれいに晴れていたなので、青い空とタージマハルの美しい白のコントラストを楽しむことが出来た。タージマハルを観光した後は、アグラ城を観光した。アグラ城は赤煉瓦の壁がとても美しく、アグラ城からもまた、ヤムナ川越しにタージマハルを見ることが出来た。



7. ホームステイ報告

《担当者》 葛原南美

★Kolkata(コルカタ) : Debarati Basu

コルカタのホームステイではどこかに出かけるというよりは、ホームシスターと夜までおしゃべりをしたり、お母さんが料理を作る場所を見せてもらったりした。ホームシスターの学生生活や流行っている音楽、JISCの準備が楽しかった話など、インド人大学生の日常に触れることができた気がする。



★Chennai(チェンナイ) : Radhika

チェンナイでは日本語を勉強していて、今年結婚したばかりの若いご夫婦の家にお世話になった。コルカタと食事や住居を比べると同じインド国内での気候や文化の違いを肌で感じた。奥さんの実家に連れて行ってもらい伝統衣装を着たり、日本の歌を歌ったりした。ヒन्दゥー教の寺院にも連れて行ってもらいクリシナの小さい人形を頂いた。



《担当者》 安達亮太

★Kolkata (コルカタ) : Smaran Basu

日本語を学んでいる学生 Ishan の家にホームステイさせて頂いた。彼のお母さんは日本語の先生をしており、英語が得意でない私にとっては有難い環境であった。インドではご先祖様の写真を家に飾る風習があるようで、壁にはご先祖様の写真がたくさん飾られていた。(写真：魚介類が好きな私のために作ってくださった魚料理)



★Chennai (チェンナイ) : Balaji Gurusamy

環境関連のビジネスをされている Balaji さんのお宅にホームステイさせて頂いた。Balaji さんのご両親、奥様、2人のお子様の6人暮らしということもあり、とても賑やかなお宅だった。Balaji さんはチェンナイの町を車で案内してくださり、寺院ではヒンドゥー式の参拝の仕方を教えて頂いた。



(写真: Balaji さんに頂いた「ミトゥナ」と呼ばれる男女交合像)

《担当者》小泉晴香

★Kolkata (コルカタ) : Aindrila Paul

インドの伝統衣装とバングルを頂きとても嬉しかった。食事は基本的に部屋でホストシスターととり、食べながら一緒に YouTube を観た。K-POP を見ながら好きなメンバーの話をするなどインドの若者の生活を垣間見ることができた。



★Chennai (チェンナイ)

インドの家庭料理を一緒に作らせてもらった。料理の様子を撮影するためにカメラを向けると、笑顔でポーズをとってくれたことがとても嬉しかった。初めて会った私に「どんどん食べて！」と言ってくださり、家族の優しさを強く感じた。



8. 修了書

Kolkata 修了書



Chennai 修了書



第四部

個人語録

Impressionistic essay

1. 日本側実行委員からの声 146
2. インド側学生からの声 147



1. 日本側実行委員からの声

20 期の活動を振り返って

第 20 期日本インド学生会議副委員長 新田 杏奈

あらゆる生命、民族が溶け合う不思議な国、インド。あの灼熱の太陽や喧騒の中に身を委ねると、この国の穏やかな包容の下に隠された大きなエネルギーを感じずにはいられない。町は人で賑わい、これからまさに成長していかにとする活気に満ちていた。

そんなインドという国に、私は訪れ、活動を通して様々な人と出会ってきた。実際に、日本におけるインドの認知度はおそらくあまり高い方ではないと思う。あってもヨガやガンジス河など、クローズアップされるインドの姿にはどこか偏りがあり、多くの日本人にとってインドは「貧しいけどどこか神秘的な国」という印象が強いのではないだろうか。それは外国の方が日本に対してサムライや富士山、桜といったものを連想することにどこか似ている。もちろん、それらはインドの一部の姿ではあるが、全てではないということがインドを訪れてみて良く分かった。

一般によく知られた神秘的なインドとは別に、私が最もインドで驚かされたのは、インドの大学生の向上心の高さであった。実際にディスカッションを行なった時の彼らの議論への熱量などはもの凄く、私は毎度圧倒されていた。加えて、インドの大学生は学問に対する好奇心が強い。私は法学部所属であった為、日本の法律について色々と聞かれたが、あまり上手く答えられなくて、自らの勉強の至らなさを実感したこともあった。またインドでは将来への人生プランを明確に持っている学生が多いようにも感じた。インドは大学に入るまでに激しい競争があると本で読んで知ってはいたが、これからのインドを担う若者達の圧倒的な向上心が今のインドのエネルギーとなっているのだ、という事実を改めて実感させられ、私にとっても大きな刺激となった。発展的なインドの姿と、伝統的なインドの姿。そのどちらも今のインドを指示している。この奥深くも魅力的な国とこれからも深く関わって行きたい、そのように思われる一か月間であった。

最後に、初めてのインドで右も左もわからない私は現地で多くのインドの人に助けももらった。観光からショッピングまでずっと一緒にいてくれたコルカタの学生メンバー。ホームステイの先々でお世話になったホストファミリー。皆とても穏やかで優しい人ばかりだった。20 期の活動が全日程無事終えることが出来たのも、たくさんの方々のご協力の賜物であると強く実感している。この場を借りて改めて御礼を申し上げたい。

2. インド側学生からの声

コルカタ本会議開催に寄せて

(Kolkata) *20thIJSC President Madhubarna Dhar*

It is an honour to have been chosen as the President of the 20th IJSC this year. We are truly proud to have come this far. All of us have put in our hard work and effort to make this year's conference a grand success. The conference has always given us the platform to strengthen the ties between the two nations, to create strong bonds of friendship, to understand teamwork, to be creative and as a result has also helped us to develop as an individual.

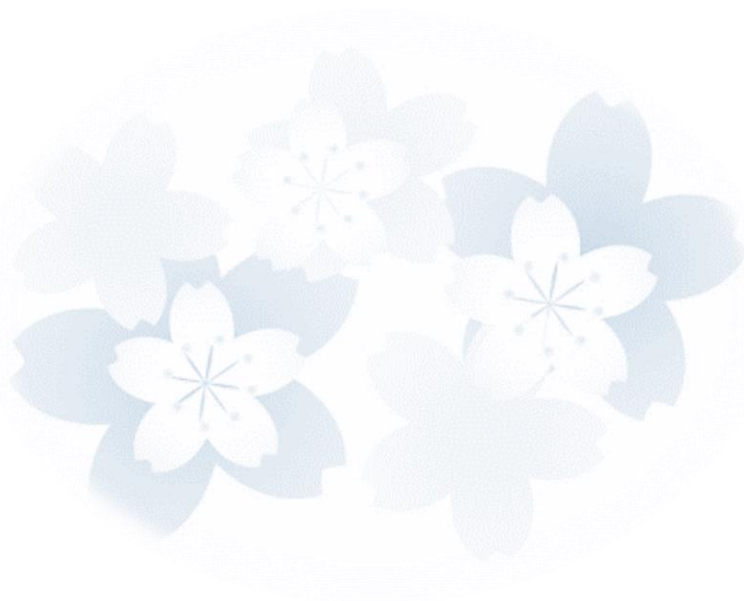
India and Japan have a long history rooted in spiritual affinity and strong cultural and civilizational ties. The citizens of both the countries share commitment to the ideals of democracy, tolerance and pluralism. India and Japan are two of the largest and oldest democracies in Asia and they view each other as partners that have responsibility for and are capable of responding to challenges which may be regional or global.

On behalf of my entire team, I would like to extend a warm welcome to all the members of the Japanese Team. I look forward to meeting you all and making everlasting memories.

I would take this opportunity to thank Mrs. Kazuko Nigam-Sensei, Mr. Jayanta Kumar Saha, Mr. Partha S.Mitra and the society members of the Nihongo Kaiwa Kyokai Society without whose constant help and support this conference would have been an impossibility.

おわりに

- | | |
|----------------|-----|
| 1. 謝辞 | 149 |
| 2. 日本インド学生会議規約 | 151 |
| 3. 編集後記 | 157 |



1. 謝辞

第 20 期日本インド学生会議の活動におきまして、私達は非常に多くの方々にご支援、ご協力を賜り、様々な面で助けて頂きました。学生会議と申しましても、学生だけではどうしても力の及ばないところや、目の行き届かない点多々ございます。そのような時、皆様からの助言が、私達をより実りある方向へと導いてくださいました。

下記の方々を初めとする、多くの方々にご尽力頂き、第 20 回目となる日本インド学生会議を無事に開催できましたことを、この場を借りて実行委員一同心よりお礼申し上げます。今後、第 20 期実行委員は任期を全うした後も OBOG として日本インド学生会議をサポートし、より良い学生会議づくりに励む所存でございます。これからもより一層のご指導いただけますよう、宜しくお願い申し上げます。

2017 年 1 月

第 20 期日本インド学生会議実行委員会 実行委員一同

記)

助成： 独立行政法人 国際交流基金
公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団

後援： 独立行政法人 国際交流基金
公益財団法人 日印協会
在インド日本国大使館
在コルカタ日本国総領事館
在チェンナイ日本国総領事館
在日本インド大使館

協力： インド…コルカタ：日本語会話協会 (Nihongo Kaiwa Kyokai)
チェンナイ：ABK-AOTS DOSOKAI
デリー：Prof. Ashok K. Chawla
(IJES 日本語学校 運営委員会 会長)

日本…顧問 近藤正規先生

創設発起人 長浜浩子先生

学生会議連絡協議会 (SCN)

日本インド学生会議 OBOG 会

2. 日本インド学生会議規約

日本インド学生会議規約

前文

日本インド学生会議は、日本とインドの両国の将来のために協議し、共に討議を行うことによってさらなる相互理解を深めることに最大の目的を置く団体である。ここに本学生会議が全ての学生に対してその門戸を平等に開き、本団体の主体を学生とすることを宣言し、この規約を確定する。そもそも本学生会議は学生の自主参加によるもので、会議全体の企画・運営は本会議を構成する学生にその権威を与えるものとし、その決定は構成員全体がこれを享受する。我々日本インド学生会議は、この規約を本学生会議における基本原理とし、これに反する如何なる規則、規定および決定を排除する。

日本インド学生会議は、両国そして国際社会の将来のために、全力を挙げて本団体の目的を達成することを誓う。

第一章 総則

第一条 名称

本団体は正式名称を「日本インド学生会議」とし、英語名を「Japan-India Student Conference」とする。

また、省略名称として「JISC（ジスク）」を使用する。

各代実行委員会に対しては「第〇期日本インド学生会議実行委員会」、年一回の本会議に対しては「第〇期日本インド学生会議本会議」を正式名称とする。尚、場合により「〇〇年東京（カルカッタ）大会」などの名称も使用する。（〇は英数字とする。）

第二条 活動

(一)本学生会議は、前文で掲げた目的を遂行するために、以下の活動を行うこととする。

1. 本会議の開催
2. 本会議の準備のための定例会および勉強会の開催
3. 会議の議事および諸活動を記録した報告書の作成
4. 会議の成果を社会に還元するための報告会の開催

5. 以上の目的を遂行するために必要と思われるあらゆる活動
- (ニ) 本学生会議は、前文の内容に鑑み、特定の政治・宗教・信条から中立である。
- (三) 本団体公式マークを以下のようにする。



第三条 規約

本団体は、この「日本インド学生会議規約」以外に、以下の各種規約・文書をそれぞれ設ける。

- 「日本インド学生会議実行委員会規定」
- 「日本インド学生会議OB・OG会会則」
- 「日本インド学生会議会費規定」
- 「日本インド学生会議創設趣意書」
- 「日本インド学生会議基本理念」
- 「日本インド学生会議各代実行委員会趣意書」
- 「日本インド学生会議長期計画案」

第二章 構成員および組織

第四条 構成員

日本インド学生会議は、実行委員、OB・OG 会員、発起人、顧問、賛助会員から構成され、これらを総括して構成員とする。

第五条 実行委員

日本インド学生会議実行委員たる要件は、別規定でこれを定める。

第六条 発起人

発起人は、本会議発足を全面的に援助し、創設のために用意された創設事務局経験者（石津達也氏、長浜浩子氏、後藤千枝氏）の3名である。

第七条 顧問

本団体は、一名以上の常任顧問を置く。顧問は本会議の主旨および目的に賛同し、かつ社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員会が委託する。

第八条 会計監査

本団体は一名以上の会計監査を置く。会計監査は社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる外部の自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員が委託する。

第九条 賛助会員

賛助会員は、創設事務局経験者、顧問経験者、および本会議実行委員会が本会議運営における協力者と認めたものとする。賛助会員は、本会議の活動報告を随時受ける権利を有する。

第十条 OB・OG 会

OB・OG 会は本学生会議実行委員会経験者によって構成される。OB・OG 会会員たる要件は別規定でこれを定める。

第十一条 総会

日本インド学生会議は、本団体の最高決定機関として総会を設置する。総会は以下の事項を決定する。

- 一、役員を選出および罷免
- 二、役員の退会
- 三、予算および決算
- 四、顧問の委託
- 五、規約の改正
- 六、その他必要と思われる事項

また総会は、現役実行委員長により招集され、全現役実行委員の三分の二以上（但しOB・OGの議決権が有効な事項に関しては、OB・OG会事務局全員と全世話人の三分の一以上も含める）の出席で成立し、出席者の過半数で議決を採択する事ができる。

主な議案に対する、現役・OB/OGが持つ議決権の一覧は以下の通りである。

<議案>	<現役の議決権>	<OB/OGの議決権>
役員を選出および罷免	○	
役員を退会	○	
予算の承認	○	
決算の承認	○	○
顧問の委託		○
規約の改正	○	○
本会議の解散	○	○
活動方針の変更	○	○
OB/OG会に関する事項	○	○

第十二条 任期および会計年度

(一) 任期および会計年度

実行委員会は、来期の本会議の六ヶ月前に改組し、その後一年間を任期および会計年度とする。

(二) 業務の延長

前項の任期の終了後も、実行委員会が必要と認めた業務に関しては、前任実行委員はその業務の遂行を求められ、それを拒否することはできない。

第十三条 退会

(一) 実行委員の任期中の退会は、実行委員長および当該者が所属する局長に届け出、承認されることにより認められる。

(二) 実行委員長および局長の退会は、実行委員全員の承認を必要とする。

第十四条 個人情報の管理の努力規定

各構成員は、本団体の活動に際して知り得た個人情報（個人に関する情報であって、個人が識別可能なものをいう。）について、みだりに団体外部および他の構成員に漏洩することのないように努めなければならない。

第三章 処分

第十五条 処分

(一) 長期に渡り実行委員としての義務を果たさず、かつ実行委員長、副実行委員長およびそれぞれの所属する局長に報告をしないもの、または前文に掲げた主旨および目的に著しく背く言動・行動をとり、なおかつ本会議運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員は、規定の有無にかかわらず、実行委員会の承認を経て実行委員会の名において、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

(二) 総会は、長期に渡り実行委員としての義務を果たさない者、または前文に掲げた主旨及び目的に著しく背く言動・行動その他日本インド学生会議の運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員に対して、規定の有無にかかわらず、3分の2以上の賛成で、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

(三) 前項の処分についての発議しようとする構成員は、まず OB・OG 会事務局および、各期代表世話人に事実の調査の申立をしなければならない。

(四) 前項の申立を受け OB・OG 会事務局および各期代表世話人は、申立人、被申立人(処分の対象として申立をされた者。以下同じ。)および他の構成員に対し、意見の聴取を含む事実の調査をおこなう。

(五) 総会は、処分についての議決を、OB・OG 会事務局および各期代表世話人の調査にのみ基づいてする。申立人、被申立人、その他関係人・OB・OG 会事務局および各期代表世話人が認めた者は、第 11 条の規定にかかわらず、議決権を有しない。

第四章 附則

第十六条 執行期日

この規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点でこれを執行する。

第十七条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、第十一条の用件を以って、承認される。

第一回改正 平成 11 年 1 月

第二回改正 平成 12 年 4 月

第三回改正 平成 16 年

3. 編集後記

9月に帰国してからはや4カ月。東京はすっかり日も短くなり、寒い日が続いております。こうして日常の生活に戻った今では、あのインドの灼熱の太陽や町の喧騒が遠く、懐かしく感じられます。帰国後コツコツと進めていた報告書の編集もようやく完成に至りました。改めて報告書を眺めながら、達成感と共に少しの寂寥感を感じております。

私にとっては初めて訪れるインドは未知の世界であり、大きな冒険の場でもありました。そして、インドという国は私の想像していた以上に果てしなく広い国でした。それは単に面積だけのことではありません。多様な民族や宗教、言語。インドに訪れてみて『多様性』という言葉の素晴らしさを改めて気づかされたように思います。

一ヶ月程ではありますが、メンバーと共にそんな多様なインドの問題点をそれぞれが真剣に議論し、また活動を通して体験してきました。日印の架け橋になろうという学生の意思をこの報告書から読み取って頂ければ幸いに思います。

最後になりますが、日本インド学生会議は今年で20年という節目の年を無事終えることが出来ました。私達第20期の渡印につきまして支えてくださった全ての皆様にこの場を借りまして改めて深い感謝の気持ちを述べさせていただきます。本当にありがとうございました。

2017年1月5日

第20期日本インド学生会議 広報局 新田 杏奈

第20期日本インド学生会議報告書

2017年1月発行

編集 広報局 新田 杏奈

発行 第20期日本インド学生会議実行委員会

代表 中村 恒輝

印刷・製本 株式会社 エイト通商